ISSN 1884-2682

大 分 大 学

高等教育開発センター紀要　第４号

は　じ　め　に

大分大学高等教育開発センター長
山下　茂

高等教育開発センター紀要第 4 号をお届けいたします。今号では，学術論文 4 編，実践報告 1 編を掲載しております。

平成 20 年の中教審答申「学士課程育の構築に向けて」において教育のあり方を課題に挙げています。確かにユニバーサル化してきた大学での教育には，以前のような教育方法では対応が難しくなってきており，これまでとは別な取り組み方が授業方法や組織的対応で必要になってきています。

大学は，教育が主たる役割の高等教育機関です。この教育は，研究の上に成り立つものとして位置づけられていると思います。また教育の活性化，充実は，研究の発展にもつながって行きます。このように，大学において教育と研究は相補的な関係であり，教員の研究活動の充実が教育活動の充実にもつながります。その研究成果の発表の場として，この紀要をご活用いただければと思います。

センターの性格から考えて見ますと，全学的な組織としての性格，また大学教育に関わる活動を中心とした組織が発行する紀要でありますので，教育の基盤となる研究，教育実践など教育に関わる論文，報告書など多様な分野の投稿が掲載できる学術雑誌です。ご投稿していただいた方々に厚く御礼申し上げますとともに，今後も多くの皆様方の投稿をお待ちしております。

最後に，皆様のご協力により年度内の発行ができましたことに感謝申し上げます。そして，これからも皆様方のご支援をいただければ幸いです。

平成 24 年 3 月

目　　次

はじめに

【学 術 論 文】

永野　昌博
Web-GIS を活用した環境教育の実践　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

谷口　勇一・甲斐　義一・汐池　聡
学校との協働関係構築を意図した総合型地域スポーツクラブをめぐる課題の諸相
―NPO 法人七瀬の里 N クラブにおける参与観察をもとに―　・・・・・・・・・・・　１３

林　智 一
高齢者の昔語りの心理臨床的意義に関する研究
―「こころの生涯学習」を支援するライフレビュー面接―・・・・・・・・・・・・・　２３

尾澤 重知・森 裕生・末本 哲雄・山下 茂*
大学間連携授業における日常の写真共有に基づくワークショップのデザインと評価　３７

【報　告】

中川　忠宣
教育の協働を推進する人材育成とネットワーク化の試み・・・・・・・・・・・・・　４９
～「協育」アドバイザー養成講座の実践から～

Web-GISを活用した環境教育の実践

永 野 昌 博

【要 旨】 身近な自然の‘環境と生きものの関係’や‘生きもの同士の関係’に子どもたちが気付き，それに興味・関心を抱いてもらうため，GPSカメラ，Web-GIS（生きもの情報館）などのICTを活用した環境教育カリキュラムを考案・実践した。実施後のアンケート調査の結果，GPSカメラもWeb-GISもいつくかの機能的な問題点は挙あげられたが，操作性に関しては，満足しているとの意見が多く得られた。また，多くの学生たちは，本カリキュラムによって‘環境と生きものの関係’や‘生きもの同士の関係’を楽しみながら気付くことができたと答え，その気付きの過程に，情報の共有化や分布図の重ね合わせといったICTの利点が大きな効果を与えていると推察された。

【キーワード】 Web-GIS，環境教育，地域学習，小学校教育，生きもの情報館

はじめに

身近な自然に関心を抱くことは，それを取り囲む地域，さらに地球全体の環境への意識を向ける大きな一歩となる（永野・白澤，2012)。身近な自然への関心を高める環境教育法の一つが，地域の自然環境調べである（永野・西，2008)。また，総合的な学習の時間のテーマに，自然，歴史，産業も含めた地域調べの取り組みも多く行われている（藤岡，2011)。しかし，それらの地域学習の多くは，紙媒体や口頭発表による成果の発信が多く，データとしての蓄積･共有がほとんどされていないのが現状である。データの蓄積がないことは，毎年同じ学年が同じ授業をできるという利点もあるが，毎年同じ授業しかできないという不利な点もある。例えば，データが蓄積・共有されていれば，地域の生き物調べというテーマであっても，植物，昆虫，鳥など分類群ごとにさらに深く学習を進めることもでき，また,同じ分類群を調べた場合でも,年次変化や環境特性を調べられるなどが考えられる。つまり,データの蓄積･共有は学習の幅を大きく広げてくれるといえる(楚山ほか,2008)。

環境教育・地域学習で子どもたちが調べた成果を蓄積し，さらにそれを仲間で共有し，

ながの・まさひろ 大分大学教育福祉科学部生物学教室（生態学）

また世界へ発信するためのツールとして注目を浴びているのが，Web-GIS である（三上ほか，2009)。GIS とは Geographic Information System の略称で，日本語では地理情報システムと訳され，緯度・経度・標高といった地理情報を入力・加工・検索・解析・地図化を行うコンピュータシステムのことである。Web-GIS とはインターネット上で操作可能な GIS のことで，Google earth などの普及によって広く知られるようになった。観光地や商業店舗の案内などにおける Web-GIS の利用が目立つが，生物情報の Web-GIS も急速に増加している（大澤，2011)。しかしながら，環境教育・地域学習に特化した Web-GIS は少なく，その実践例も少ない（三上・永野，2008)。

そこで，今回，既存の環境教育・地域学習に有効な Web-GIS を調査し，選定された Web-GIS（生きもの情報館‘http://www.ikimono-lib.jp/’）を用いた環境教育カリキュラムを計画・実施した。‘生きもの情報館’は，公益財団法人日本自然保護協会（以下，日本自然保護協会と称す）が運営しており，その運営主旨は，市民からの生物情報の収集，それによる自然環境のモニタリングおよび評価である。そのため，会員登録の料金等も必要なく，誰でも気軽に参加することがでる（日本自然保護協会，2008)。また，‘生きもの情報館’は 2011 年より緯度と経度を測定・記録できる GPS 機能付きのデジタルスチルカメラ（以後，GPS カメラと略す）にも対応している。

大分大学は，65 ヘクタールの広大な敷地をもち，この中には多様な環境・多様な生物が存在しており（永野・後藤，2012)，環境教育に適した場所いるといえる。また，本学には，貸し出し用の GPS カメラが 30 台以上あり，また，学内のコンピュータルーム（マルチメディア教室）も 25 台の高性能な PC を備えている。

本研究の目的は，１）大分大学が所有する自然環境，ICT 環境を有効活用した環境教育カリキュラムを考案し，それを実践すること。２）その環境教育カリキュラムの受講者アンケートの分析により，本カリキュラムが，受講者の自然や生き物に対しての自発的な気付きがどのように，どれぐらい引き出せるかを知ること。３）それにより新たな Web-GIS を活用した環境教育の可能性，ならびに，環境教育と生物情報収集・共有化の接点を探ることである。

方法

本研究は，著者が担当する大分大学教育福祉科学部人間福祉科学課程環境分野の 2011 年度の後期科目「環境生物学実習Ｉ」の中で実施した。本実習は，環境と生物の関係性を実習や体験を通じて習得することを目指しており，1 回の授業時間は 90 分で全 15 回開講となっている。本実習の第 1 回から第 11 回までは，昆虫や植物等の野外調査や標本づくりなどを行い，第 12 回から第 15 回の 4 回に渡り本カリキュラムを実施した。ただし，本稿では，第 12 回の実習を第 1 回と記し，第 13 回，第 14 回，第 15 回についてはそれぞれ，第 2 回，第 3 回，第 4 回と記すこととする。本実習の受講生は 11 名で，これらの学生は本稿に関わる 4 回の実習の全てを受講した。

本研究に使用した機材は，GPS カメラと一般的なパーソナルコンピュータ（以下，パソコンと略す）と USB フラッシュメモリ（以下，USB メモリと略す）である。GPS カメラは大分大学高等教育開発センターが所管する Panasonic 製の LUMIX-TZ10 を受講者 1 人に 1

台，パソコンは教育福祉科学部のマルチメディア教室にある Hewlett-Packard 社製の 600-1140jp（CPU：2.13GHz，メモリ 4GB，HDD640GB）を 1 人 1 台，USB メモリは 4GB の一般的な製品を 1 班 1 個用いた。

情報の登録・解析の Web-GIS には，日本自然保護協会が運営する「生きもの情報館－里山での市民参加の自然環境モニタリング調査－（http://www.ikimono-lib.jp/）」を用いた（図 1）。本 Web-GIS は，副題の通り，市民参加による自然環境モニタリング調査を主な目的として開発されたシステムであり，会員登録を行えば，誰でも無料で利用することができる。本研究のようにシステム内にグループ（特定の会員だけが情報の登録・閲覧をできる）を立ち上げる場合も一定の条件を満たせば無料である。

本 Web-GIS の情報登録は 2 段階方式となっており，1 段階目では，「私のフィールドノート」というページで，これは自分用の情報登録ページである。2 段階目の「参加グループリスト」は，「私のフィールドノート」の情報をグループ内で共有化させるページである。「私のフィールドノート」への登録内容は，1）作成日時，2）タイトル（64 文字以内），3）調査地，4）調査地の座標（緯度と経度），5）調査日付，6）分類（植物，哺乳類，鳥類，両生類，は虫類，チョウ類，トンボ類，ホタル類，昆虫類（チョウ，トンボ，ホタルを除く），その他）の 10 のカテゴリからの選択），7）見つけたもの（種名），8）備考，9）画像（対応画像形式 JPEG，GIF，PNG，対応画像サイズ 2MB 以内）の 9 つあり，8）と 9）は自由入力項目であるが，それ以外は，必須の入力項目となっている。また，GPS カメラで撮影された写真のように画像データに緯度経度情報が付記されていれば，3）調査地と 4）調査地の座標に自動でそれを反映させてくれる。「私のフィールドノート」に登録した情報を「参加グループリスト」にも登録するためには，「調査リスト」（「私のフィールドノート」の登録情報がリスト化された

図 1.‘生きもの情報館’のトップページ

ページ）を開き，共有化したい情報を選択し，それを「グループにコピー」すれば，共有化完了である。本 Web-GIS には，「私のフィールドノート」の情報，もしくは，「参加グループリスト」の情報から必要な情報だけを検索し，それらの分布図を作成する機能を持っている。また，分布図の重ね合わせ機能もある。それらの詳細については，日本自然保護協会（2008）を参照のこと。

以下，本実施内容を回ごとに記す。

図 2. GPS カメラの操作方法実習の

第 1 回：調査方法の指導
（2011 年 12 月 20 日実施）

本実習の目的や方法の概要説明をした。その後，学生にこの時期に野外でみられる生きものを 12 種挙げてもらい，その中から調査対象地に分布していない種や同定困難な種を教員の判断で選定対象から外し，合計 6 種を調査対象種とした。選定された調査対象種は，カマキリ科（Mantidae）の卵嚢（大分大学構内には 4 種のカマキリの生息を確認しているが，それらは区別しなかった），ミノムシ（ミノガ科（Psychidae）の幼虫。大分大学構内に複数種いると思われるが，それらは区別しなかった），営巣性のクモ目（Araneae）（この時期にみられる多くはジョロウグモ（*Nephila clavata*）であるが，種同定は行わなかった）。ヤツデ（*Fatsia japonica*），ススキ（*Miscanthus sinensis*），セイタカアワダチソウ（*Solidago canadensis* var. *scabra*）である。その後，野外に出て，GPS カメラの操作方法と調査対象種の見分け方の実習を行った（図 2）。この実習のルートは，教育福祉科学部 B 棟裏の駐車場を起点とし，実験研究棟横の駐車場の外周を巡り，事務局棟に繋がるサクラ並木の終わりまでである（図 3 の白塗り部分）。尚，この時得られたデータも調査データとして扱った。

図 3. 調査地

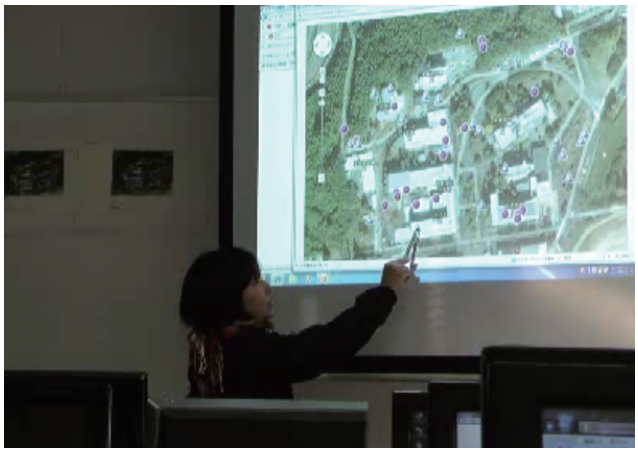

図 4. 発表のようす

第 2 回：野外調査（2011 年 1 月 10 日実施）

学生 2 名を 1 班とし，計 6 班をつくった（1 名のところはティーチングアシスタント（以

下 TA と略す）と組んだ)。調査地は，教育福祉科学部と経済学部の周辺とし，そこを便宜的に図 3 のように 6 地区（白以外の色塗り部分）に分け，1 班 1 地区を担当してもらった。調査方法は，上述の 6 種を探し，見つけた全ての個体を GPS カメラで撮るのみである。但し，ススキとセイタカアワダチソウは集団で生育しており，個体ごとの撮影は，時間がかかるため，5m の範囲の複数個体を 1 個体として扱うこととした。調査時間は，1 時間（15：10～16：10）とした。調査で撮った写真は，パソコンを経由して，USB メモリに移管した。

第 3 回：データ登録（2011 年 1 月 17 日実施）

今回利用した Web-GIS（生きもの情報館 http://www.ikimono-lib.jp/）へデータを登録するには，まず個人で生きもの情報館の会員登録が必要となる。本会員登録には，「名前」と「メールアドレス」と「性別」のみが必須登録情報である。授業時間の関係上，事前に会員登録の途中までは教員側で完了した状態から始めた。会員登録法は，生きもの情報館の会員登録ページ（http://www.ikimono-lib.jp/register/step1/）を参照のこと。

データの登録は，マルチメティア教室のパソコンを学生 1 人が 1 台使用して行った。学生が登録するデータは第 2 回の実習で自ら撮影した写真である。登録方法の指導の際，最初は，教員がパソコンとプロジェクターを使って，実際の登録方法を段階的に示し，学生はそれを真似る形で習得した。また，必要な操作方法だけを抜粋した本カリキュラム独自のマニュアルも作成して全員に配布した。2 つ目以降のデータ登録は，各自で実施してもらい，随時，教員ならびに TA がアドバイスをしながら進めた。尚，データ登録方法については，上述ならびに生きもの情報館マニュアル（http://www.ikimono-lib.jp/files/manual.pdf）を参照のこと。実習時間 90 分の時間配分は，パソコンの立ち上げや概要説明，会員登録完了作業までを約 10 分間，「私のフィールドノート」へのデータ登録法の説明を約 20 分間，学生各自で約 10 枚程度の情報登録を約 50 分間，「参加グループリスト」へのデータ共有法の説明と実施を合わせて約 5 分，後片付けを約 5 分である。

第 4 回：分布図作成，成果発表，アンケート調査（2011 年 1 月 24 日実施）

この授業のはじめに，6 つの調査対象種の中から班で 1 種，他班との重複を避けて選んでもらった。その後，第 3 回の実習で‘生きもの情報館’に登録したデータからその選んだ種の分布図を作成してもらった。この分布図作成法についても，第 3 回の実習と同様の方法で，まず，教員の操作を学生が真似る形で行い，その後，学生に自由に分布図を作成してもらった。また，TA によるサポート，独自作成したマニュアルの配布も第 3 回の実習同様に行った。作成した分布図は，A3 用紙にカラーでプリントアウトしてもらい，それを教室前方のホワイトボードに磁石を使って貼り付けてもらった。全ての班の分布図が貼り終わった時点で，全員に調査した 6 種の分布図を見比べてもらい，自分の班が選んだ種と何らかの関係がありそうな種の検討をつけてもらった。尚，見比べてもらう前に，口頭で複数の生物が同所的に存在するときには，「競争関係」，「共存関係」，「無関係」などの関係があり，それらを意識するように伝えた。次いで，学生には，‘生きもの情報館’を使い，自分の班が選んだ種とそれと何らかの関わりがありそうな種の分布の重ね合わせを行ってもらった（図 5，図 6)。操作法の指導法については上記同様である。

その後，全ての班に 5 分程度の条件で，１）自分の班が選んだ種の分布状況および分布特性，２）自分の班が選んだ種とそれと何らかの関わりがありそうな種の分布状況および

その関連性に関して発表してもらった。発表は教室前方のプロジェクターを使い，上記の作業で作成した分布図を大型スクリーンに投影して行った（図 4)。

全班の発表が終わった後，教員が全体的な講評を述べ，第 1 回から第 4 回にわたる本カリキュラムに関するアンケートを配布した。アンケートは時間の都合上，持ち帰ってもらい，後日 1 週間以内に提出してもらった。アンケートの内容は ICT リテラシーに関すること，本カリキュラムに関すること，‘生きもの情報館’のシステムに関することで合計 25 問を用意した。具体的な質問内容につては結果の章に示す。実習時間 90 分の時間配分は，パソコンの立ち上げや概要説明等を約 5 分間，分布図の作成とそのプリントアウトまでを約 30 分間，分布図の見比べ時間を約 5 分間，分布図の重ね合わせを約 20 分間，発表の時間を約 20 分間，講評・アンケート配布・後片付けをまとめて約 10 分間である。

結果と考察

本カリキュラムの課題や効果を抽出するためのアンケート調査の結果を以下に示す。問 1 から問 7 は実習で使用した GPS カメラの利用頻度や操作性などについて，問 8 から問 11 までは野外調査について，問 12 から問 14 までは一般的な Web-GIS に関して，問 15 から問 21 は今回利用した Web-GIS‘生きもの情報館’について，問 22 から問 25 は本カリキュラム全体についての設問である。尚，アンケートへの選択肢は〔　〕の中に，その回答者数（N＝11）は【　】の中に記載した。

●GPS カメラを使った生きもの探しに関するアンケート～GPS カメラについて～

１）12 月 20 日以前のデジタルカメラの利用頻度を教えてください。
〔頻繁に使う【1】，時々使う【4】，あまり使わない【6】，今回の授業で初めて使った【0】〕

２）12 月 20 日以前に GPS 機能付デジタルカメラの利用頻度を教えてください。
〔頻繁に使う【0】，時々使う【0】，あまり使わない【1】，今回の授業で初めて使った【10】〕

３）12 月 20 日以前の GPS（衛星を使い現在地を測定・記録するシステム）の認知度を教えてください。
〔よく知っていた【2】，知っていた【6】，なんとなく知っていた【1】，今回初めて知った【2】〕

４）12 月 20 日の GPS の操作説明の授業においての理解度を教えてください。
〔十分理解できた【8】，理解できた【3】，あまり理解できなかった【0】，全く理解できなかった【0】〕

５）12 月 20 日と 1 月 10 日で操作した GPS カメラの操作性の感想について教えください。
〔とても簡単だった【6】，簡単だった【4】，普通【0】，難しかった【1】，とても難しかった【0】〕

６）GPS カメラの操作において迷ったこと，分からなかったこと，不便に感じたことがあれば教えてください（自由記載）（以下，抜粋）。
・GPS の衛星信号の受信に時間がかかった。　・操作法は分かりやすかった。

・森に入ると受信感度が悪くなった（位置の誤差範囲が 60mになった）。

７）GPS カメラをどのような場面で使いたいですか？どのような使い道が考えられますか？（自由記載）（以下，抜粋）。

・旅行。　・今回の授業のような分布調査のような学習・研究活動。

●GPS カメラを使った生きもの探しに関するアンケート～野外調査について～

８）12 月 20 日の生きもの探しの方法の説明の理解度を教えてください。

〔十分理解できた【8】，理解できた【3】，あまり理解できなかった【0】，全く理解できなかった【0】〕

９）1 月 10 日の生きもの探しを行った調査範囲はどうでしたか？

〔とても広かった【0】，少し広かった【0】，ちょうどよかった【8】，少し狭かった【3】，狭すぎた【0】〕

１０）1 月 10 日の生きもの探しを行った対象生物（6 種）の数はどうでしたか？

〔とても多かった【0】，少し多かった【0】，ちょうどよかった【8】，少し少なかった【3】，少なすぎた【0】〕

１１）1 月 10 日の生きもの探しの中で，どのようなことを感じたり，見つけたりすることができましたか？（自由記載）（以下，抜粋）

・12 月 20 日の時と比べて生きものが少ないように感じた。

・日頃，生活している周りに多くの生きものがいることに気が付いた。

●Web-GIS の利用に関するアンケート

１２）インターネットの利用頻度を教えてください。

〔頻繁に使う【11】，時々使う【0】，滅多に使わない【0】，今回の授業で初めて使った【0】〕

１３）1 月 17 日以前の GIS（地図アプリ(Google map など)も含む）の利用頻度を教えてください。

〔頻繁に使う【2】，時々使う【5】，滅多に使わない【3】，今回の授業で初めて使った【1】〕

１４）問 13）で‘頻繁に使う’，‘時々使う’，‘滅多に使わない’と答えた方，どのような使い方をしていますか？

〔お店など目的地の場所（道）さがし【7】，現在の自分の位置を探す【3】，写真登録【0】，

④その他：自由回答レポート作成のため，卒論研究のため）〕

●Web-GIS‘生きもの情報館’を使った生きものマップづくりに関するアンケート

１５）「生きもの情報館」への情報登録の操作性（第 3 回の授業）はいかがでしたか？/

〔とても簡単だった【6】，簡単だった【4】，普通【1】，難しかった【0】，とても難しかった【0】）

１６）「生きもの情報館」での地図づくりの操作性（第 4 回の授業）はいかがでしたか？/

〔とても簡単だった【3】，簡単だった【5】，普通【0】，難しかった【0】，とても難しかった【0】〕

１７）「生きもの情報館」への情報登録（第3回の実習内容）において「迷ったこと」，「分からなかったこと」，「発生したトラブル」，「欲しい機能」があれば教えてください。（自由記載）（以下，抜粋）

・会員登録の処理に時間がかかった。

・登録できる写真のサイズが2MB以下であるが，もう少し大きいサイズにも対応して欲しい。もしくは，大サイズの写真でも自動的に小さくしてくれる機能があればいい。

・緯度経度情報付の写真を登録したら，地図もそれと連動してズームして欲しい。

・1タイトルに登録できる記録の制限を5以上にして欲しい。

１８）「生きもの情報館」での分布図づくり（第4回の授業）において「迷ったこと」，「分からなかったこと」，「発生したトラブル」，「欲しい機能」があれば教えてください。（自由記載）（以下，抜粋）

・分布図にする記録を検索し，20件以上の検索結果があった場合，20件単位でしか登録（変更）ができないため，一括登録（変更）ができるようにして欲しい。

・凡例の変更を1つずつしなくてはならないが，一括で変更できる機能が欲しい。

・凡例の上限が6つであるが，自由に増やせるようにして欲しい。

・つくった分布図を保管することができれば，分布の重ね合わせ作業が楽になると思った。

・つくった分布図をグループ内で共有できればいいと思った。

１９）調査した生きもの1種のみの分布図をつくることでどのようなことが分かりましたか？（自由記載）（以下，抜粋）

・広い範囲を一目で確認できたので，生き物により生息環境の好みがわかった。

・カマキリは植物が多いところに多く見られた。

２０）生きものの分布図を重ね合わせることでどのようなことが分かりましたか？（自由記載）（以下，抜粋）

・種間での分布の相違点や共通点を発見することがき，その関係性を推測ことができた。

・ヤツデの分布とクモの分布が似ており，2種が同じ環境を好むのか，ヤツデが生育するからクモが生育するのか，疑問に思った。

２１）‘生きもの情報館’のようなGISを使うことで，思いつく，「楽しいこと」，「役に立つこと」を提案してください。（自由記載）（以下，抜粋）

・生物マップ以外にもハザードマップ，店情報マップ，不便な所マップなど。

・車窓の風景を利用して疑似観光を楽しむ。

・自分の居場所を相手に伝える。

・旅行での写真の整理。

●全体に関するアンケート

２２）ICT 機器（コンピュータ）を使った情報の共有・発信とアナログ（撮った写真を紙に貼る）による情報の共有・発信，どちらが好みですか？

〔ICT 機器【9】，アナログ【2】〕

２３）問 22）の選択理由は？（自由記載）（以下，抜粋）

○ICT 派　・情報の発信・共有が簡単にできる。
・グループ内のデータと比較しやすい。
・学生が同時に作業ができて効率的だから。
・レイアウトや集計などの作業が簡単にできる。

○アナログ派　・ICT を使えば，全国の人へ発信できるが，身近な人への発信力はアナログの方が優ると思う。

２４）今回の授業形式『野外で GPS カメラで撮影し，その撮影データを室内のディスクトップパソコンを使って入力する』と，『i Pad（GPS カメラ付きデータ通信端末）などを使い，野外で撮影したデータをその場で Web サイトに登録する』どちらがいいと思いますか？

〔前者【9】，後者【2】〕

２５）問 24 の選択理由を教えてください

○前者派　・撮影したものを全て登録するわけではなく，それらを選別する作業が必要であるため，野外での写真撮影とデータの登録作業は分けた方が効率的。
・野外だとデータ登録作業で誤作動や誤操作を生じる可能性が高い。また，そのようなトラブルが起こったときに，先生など聞ける人が近くにいないと困る。

○後者派　・その時感じたことを伝えられる。
・一貫して作業を行う方が効率的であると思ったから。

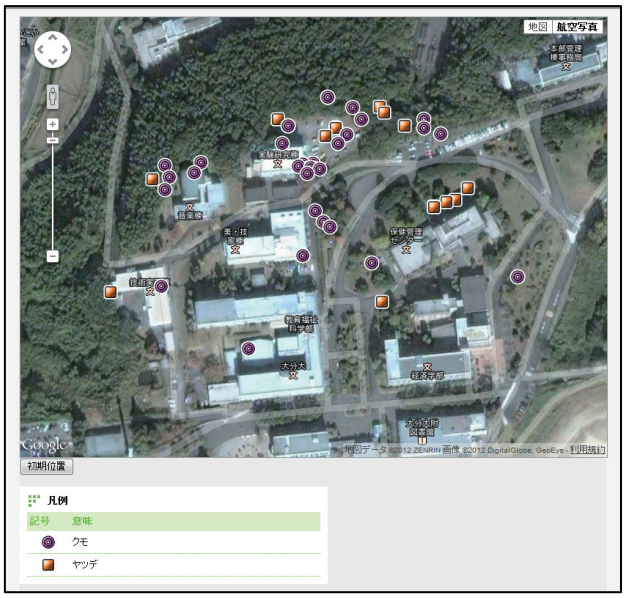

図 5. クモとヤツデを分布の重ね合わせマップ

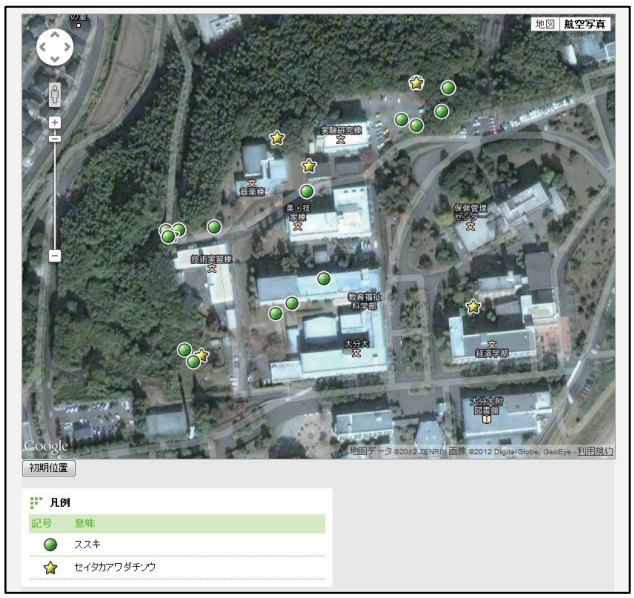

図 6. ススキとセイタカアワダチソウを分布の重ね合わせマップ

GPS カメラの利用頻度や操作性についてのアンケート結果より（問１，問２），本受講生は一般的なデジタルカメラの利用経験は高いものの，GPS カメラは 9 割以上の者は「今回の授業で初めて使った」という回答であったことから，GPS カメラの普及率は現時点では未だ低いといえる。しかし，GPS の認知度は，7 割強と高かった（問３）。これは，おそらく，後述するナビゲーションシステムなどの影響と思われる。GPS の操作説明の理解度は 100％の受講生が「十分理解できた」もしくは「理解できた」と答え（問４），また，操作性の感想も 9 割強の受講生が「とても簡単だった」もしくは「簡単だった」と答えていた（問５）。GPS の操作性等の不便さの自由記載についても，GPS の受信感度による内容が大半を占めており，それ以外の不満の意見はなかった（問６）。また，GPS の他での利用の可能性を聞いたところ，旅行や今回のような調査活動という意見が多く得られた（問 7）。

GPS カメラを使った野外調査の理解度は，100％の受講者が，「十分理解できた」もしくは「理解できた」であった（問８）。今回の生きもの調査の対象種は，カマキリの卵嚢，ミノムシ，クモ，ヤツデ，ススキ，セイタカアワダチソウの 6 種で，動物 3 種は種レベルではなく，科レベルのより大きな分類単位で同定したこと，植物は同定が容易な種を選んだこと，また，野外で実物を使って同定法や調査法の説明をしたことが理解度を高めたものと考えられる。各班の調査面積は，4～5ha の範囲であったが，この面積による調査範囲の適正度合を聞いたところ，「ちょうどよかった」が 7 割強で，「少し狭かった」が 2 割強であり，広いと感じた受講生は 0％であった（問９）。また，調査対象種が上記 6 種であったことに対しての適正度合の問に対しては「ちょうどよかった」が 7 割強で，「少し少なかった」が 2 割強であり，多いと感じた学生は 0％であった（問１０）。このことから 1 月における本野外調査においては，調査対象種は 6 種，調査範囲は 4～5ha が概ね適当と思われる。また，調査範囲をもう少し広く，調査対象種をもう少し多く設定することも可能と思われる。しかしながら，今回は生き物の活性が最も低い冬期の結果であるため，春から秋の野外調査では，別の調査設計が必要であろう。また，この野外調査を通じどのようなことを感じたのかを自由記載回答で多かったのが，「身近な環境に多くの生き物がいたこと」や「冬なのに意外に多くの生き物がいたこと」に対する驚きであった（問１１）。このことから，本調査は，受講者に身近な環境や環境と生き物の関係へ意識を向けさせる有効な環境教育カリキュラムと思われる。

インターネットの利用頻度について聞いたところ，100％の受講生が「頻繁に使う」との答えで（問 12），地図アプリケーションも含めた GIS の利用頻度においても 7 割近い受講生が「頻繁に使う」もしくは「時々使う」と答えており（問 13），今や GIS も一般的に普及しているといえる。しかし，それらの GIS 使用方法は「お店などの場所探し」，「自分の位置探し」がほとんどで，位置データを使い調査・解析するといった例はあまりみられなかった（問 14）。

‘生きもの情報館’を使った情報登録の操作性の難易度合を聞いた結果では，「とても簡単だった」が半数以上を占め，また，「難しかった」と「とても難しかった」の意見は 0％であった（問 15）。また，‘生きもの情報館’を使った 1 種の分布図づくりの操作性においても 100％の受講生が「とても簡単だった」もしくは「簡単だった」と答えたことから（問 16），‘生きもの情報館’を使った情報登録，分布図づくりは，少なくとも大学生には容易に導入可能であるといえる。また，情報登録過程におけるトラブルや機能の追加要望があ

ればとの自由記載による質問においても「会員登録に時間を要した」もしくは,「登録できる写真サイズを 2MB よりも大きくして欲しい」というハード面に近い要望が多く(問１７),このことからも本登録システムは完成に近いと言えよう。しかし，分布図づくりの過程における同質問では，分布図をつくるいろいろな場面において，一括登録，一括変更ができないという機能的な追加要望が挙げられた（問１８）。これらの機能は，地図作成をより早く，より簡便にする上でも必須の機能と考えられる。ある１種の生きものの分布図をつくったことで分かったことについての自由記載回答では，受講者全員のデータから一つの地図をつくったこと，また，分布データとデジタルオルソ画像（航空写真）の重ね合わせによって環境（景観）と生物の分布の関係を知ることができたとの意見が多く挙げられていた（問１９）。また，複数の生きものの分布図の重ね合わせから分かったことについての自由記載回答では，種間の分布の相違点や共通点に関する発見や疑問がみられた（問２０）。これらの発見や疑問は生き物と環境，生き物と生き物の関係性を深く考えるきっかけとなったと考えられ,‘生きもの情報館’を使った本カリキュラムは，これらを基軸とした環境教育を進める上での有力な方法となり得るであろう。

本カリキュラムのように ICT 機器を使った情報の地図化，共有化とアナログ（撮った写真を紙に貼る）情報の地図化，共有化のどちらが好みかを聞いたところ，ICT との答えが 9 割近くを占め（問２２）,その理由は,‘より多くの人へ，より早く，より同時に情報を発信・共有できるので効率的’との理由であった（問２３）。一方のアナログ派の２名は，ICT の広範囲な発信力は認めながらも，身近な人たちへの発信力はアナログや紙媒体の方が優るとの理由であった（問２３）。これらのことから，ICT は，情報発信・共有の有効なツールではあるが,時と場合によってはアナログの方法が有効なこともあると予想されるため，ICT とアナログ（紙媒体）のメリットとデメリットを十分に認識した上でカリキュラムを立てる必要があると考えられる。

今回のカリキュラムでは，野外での情報収集（写真撮影）は GPS カメラを使い，その情報登録は室内でディスクトップパソコンを使って行ったが,‘生き物情報館’は，現時点でもカメラとワイヤレスの通信機能が搭載されたノートパソコンやカメラ付の Android 系のタブレットパソコンを使えば，情報収集から情報登録までの作業を一貫して行うことができる。また，iPad などの Apple 社系のモバイル端末も多少の情報登録システム改修を行えば，これが可能である（小此木私信)。そこで，本カリキュラムのような野外，室内の作業を切り分ける方式と野外で撮影から登録までを一貫してできる方式ではどちらのカリキュラムが適当と思うかを聞いたところ，8 割を超す多くの受講生は，野外・室内の作業切り分け方式がいいとの回答であった（問２４)。その理由の多くは，野外では調査，室内では登録と作業を切り分けた方が，作業効率がよく，誤操作も少ないとの予想によるものであった(問２５)。この結果は,本カリキュラムの大部分を野外で実施できるようにと Web-GIS システムとカリキュラムの両方の改修を構想していた著者にとっては，意外な反応であった。しかし，実際の作業効率を考えると，確かに，野外では調査（写真撮影）に集中し，室内では，その登録や分析に集中した方がより効果的であると推測される。しかし，今回の受講者は，上記の ICT とアナログの比較ならびに撮影・登録作業の切り分けと一連のどちらか一方しか経験していないため，十分な判断根拠をもっていない状態，もしくは，偏った判断根拠をもっているといえる。そのため，今後は，十分な判断根拠をもった状態の

受講者，より多くの受講者を対象に，アンケートを行う必要があるであろう。

本研究成果を踏まえ，今後は，‘生きもの情報館’のプログラムの改修をサイト運営者と共に進めていくと共に，オリジナルの Web-GIS の開発も進めていき（永野ら，2009），ICT と環境学習効果の親和性がより高いカリキュラムを提案，実践していきたい。

謝辞

本研究は，‘生きもの情報館’の開発ならびに管理・運営をされている小此木宏明氏（日本自然保護協会）の多大なる協力によって実施することができた。マルチメティア教室の利用時には山下茂博士（大分大学教育福祉科学部）に，GPS カメラ等の機材の賃借時には末本哲雄博士（同大高等教育開発センター）に便宜を図っていただいた。ティーチングアシスタント，ボランティアアシスタントとして後藤大輝氏，後藤砂紀氏，白澤佳那子氏，中野吾一氏，山本一成氏（いずれも同大教育福祉科学部）には多大なる支援をいただいた。本研究の実習を受講し，アンケートに答えたくれた大分大学教育福祉科学部の学生諸子 11 名。以上の方々に心より深く感謝の意を表す。

本研究は，平成 23 年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金（研究活動スタート支援））の「ICT を活用した生物多様性を学ぶ環境教育カリキュラムの開発（研究課題番号：23830048）」，ならびに，平成 23 年度大分大学特別経費「動機づけと形成的評価を重視した学士課程教育開発」の一環として実施されたものである。

参考文献

大澤剛士・栗原隆・中谷至伸・吉松慎一（2011）：生物多様性情報の整備と活用方法―Web 技術を用いた昆虫標本情報閲覧システムの開発を例に―，保全生態学研究，16，231－241.

楚山理香・池田雄二・田辺慎一・小口成一・五百川裕（2008）：学習効果の伝承によるブナ林の多面的機能調査～中学一年生総合学習「ブナ林に着目し，松之山の自然を調べる」～，地域連携による農村ならではの学習展開，54－62．東頸印刷，新潟.

永野昌博・白澤佳那子（2012）：身近な自然を活かした環境教育の実践，大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター，29，107－117.

永野昌博・西浩孝（2008）：地域連携による農村ならではの学習展開，78pp．東頸印刷，新潟.

永野昌博・後藤砂紀（2011）：土壌動物を指標とした植生管理と生物多様性の関係－大分大学構内における土壌動物を用いた自然の豊かさ評価－，大分大学教育福祉科学部研究紀要，34(1)，73-84.

永野昌博・山本徳司・安中誠司・唐崎卓也・栗田英治・中平勝子・三上喜貴・福村好美・三上光一・田辺慎一・野口麻穂子・大脇淳・深沢知里（2009）：住民参加型地域振興のためのユビキタスフィールドナビゲーションシステムの開発，戦略的情報通信研究開発推進制度，第 5 回成果発表会論文集，102-103.

日本自然保護協会(2008):生き物情報館 - 操作マニュアル,1－12.(http://www.ikimono-lib.jp/files/manual.pdf).

藤岡達也（2011）：環境教育と総合的な学習の時間，204pp，協同出版，東京.

三上光一・永野昌博・山本徳司・横山純・中平勝子（2009）：GIS を活用した博学連携地域学習カリキュラムに関する実践的研究，教育実践学研究，10（2），1－10.

三上光一・永野昌博（2008）：博物館を核とした地域コミュニティと地域情報をつなぐ Web-GIS の開発，日本教育工学会第 24 回全国大会論文集，885-886.

学校との協働関係構築を意図した総合型地域スポーツクラブをめぐる課題の諸相
—NPO法人七瀬の里Nクラブにおける参与観察をもとに—

谷口勇一（教育福祉科学部）
甲斐義一（大学院教育学研究科）
汐池　聡（教育福祉科学部学部生）

【要約】

本研究は、学校との協働関係構築を意図した総合型地域スポーツクラブに焦点化し、各種事業展開の中から見出された成果と課題を把捉することが目的とされた。対象となる総合型地域スポーツクラブは、大分市野津原のNPO法人七瀬の里Nクラブである。当該クラブにおいては、2011(平成 23)年度に文部科学省より「元気な日本スポーツ立国プロジェクト」事業を受託している。本研究では、事業展開の一つである「小学校体育活動コーディネーター」活動への参与観察と関係者 4 名に対するインタビュー調査を実施した。

導き出された成果と課題は以下のとおりである。①当該事業の成果は、「体育授業の専門性向上」「教員の負担軽減」であった、②当該事業の課題は、「クラブから学校に派遣されるコーディネーターの立場をめぐる不明確さの克服」「当該事業をめぐる地域内関係機関によるコンセンサス形成」でった。

【キーワード】
学校、総合型地域スポーツクラブ、協働関係、小学校体育活動コーディネーター

はじめに

2010年に文部科学省より「スポーツ立国戦略—スポーツコミュニティ・ニッポン」が発表された。重点戦略の一つである「ライフステージに応じたスポーツ機会の創造」においては、「新しい公共」を担う総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）をはじめとしたコミュニティスポーツクラブの推進が掲げられ、学校と学校外（地域）間連携の充実発展が視野に入れられている[注1)]。

その後、文部科学省においては、2011年に「元気な日本スポーツ立国プロジェクト」を立ち上げ、上述した学校と学校外（地域）間連携の充実発展をはじめとした具体的な施策展開を図っている。当該プロジェクトにおいては、「スポーツコミュニティの形成促進」と「マルチサポートを通じたトップアスリートの育成・強化」が目指されており、なかでも前者においては、「トップアスリート等の配置による地域スポーツの支援」「プロジェクトリーダーの配置による巡回指導等の調整と地域の課題解決への取組」「小学校体育活動コーディネーターの派遣による支援」といった各種の取り組みが展開されている（図1)。

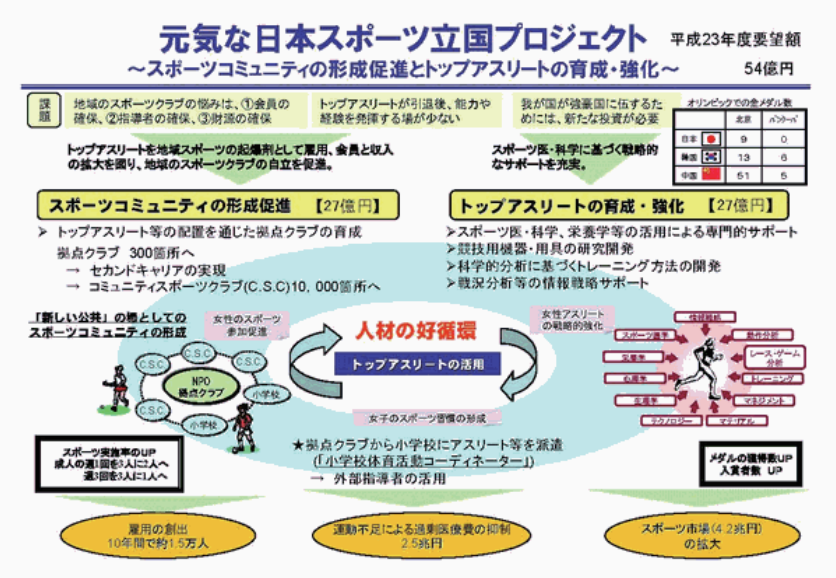

図 1. 元気な日本スポーツ立国プロジェクト概要[注 2)]

当該プロジェクトにおける学校と学校外（地域）間をめぐる人材の「好循環」が意図された「スポーツコミュニティの形成促進」事業は、地域社会においてすでに活動が盛んになされている総合型クラブによる実施体制が想定され、初年度(平成 23 年度)においては、全国の 19 クラブが「拠点クラブ」として選定された。その中の一つに、本研究において取りあげる大分市野津原の NPO 法人七瀬の里 N クラブ（以下、N クラブ）が含まれている。

N クラブは、2004 年に設立され、「中学校運動部活動（以下、部活動）を中心とした総合型クラブ」として全国的に注目を集めた。N クラブでは設立当初から、当該地域における児童生徒のスポーツ環境整備が意図されており、種目数が限定されていた部活動の再生、顧問教師の負担軽減、さらには当該地域内の既存スポーツ少年団活動の連帯感の醸成等を意図した学校と学校外（地域）との連携協力関係を構築してきた。その後、2007 年には NPO 法人格を取得し、2012 年 1 月現在では約 800 名の会員を有する。

スポーツ活動を通じた学校と学校外（地域）間の連携協力関係を有してきた N クラブにおいては、上述した「元気な日本スポーツ立国プロジェクト」への関与を切望し、応募の上、採択・受託の運びとなった。N クラブの受託内容は「スポーツコミュニティの形成促進」事業であり、2011（平成 23）年度事業補助金額は 1300 万円余である。N クラブにおける当該事業への関与にあたっての趣旨は、「地域のスポーツ拠点として質の高いスポーツ環境を整え、地域住民の心の拠り所としての存在感を示し、世代を越え子どもから高齢者までが一つになれるスポーツコミュニティを形成する」こととされており、なかでも、これまでのクラブ運営で培われてきた学校との関係性を「連携」から「協働」へと高めることも視野に入れられている[注 3)]。

学校と学校外（地域）のスポーツ活動を通じた関係性に言及した研究はこれまでにも数多く存在する。近年の研究動向についてレビューすると、まず、馬場（2008）は、今日的スポーツ（教育）政策の一つである子どもの体力向上を意図した学校、家庭、地域間の連携モデル構築の可能性と限界について論じている。当該研究では、「歴史的にみて、学校と学校外（地域）の関係性が脆弱であったことに伴い、子どもの体力向上に関する各種の取

り組み時の学校外（地域）との具体的な協力関係構築に苦慮するケースが多い」ことを指摘している。また、矢花ほか（2007）は、総合型クラブと学校による連携プログラムの現状と課題について事例研究し､「総合型クラブからの学校への各種アプローチに対する教員の反応は前向きとは言い難く、新たに生起する可能性を有する多忙状態への警戒感」が両者間の連携を促進させない要因であると論じている。

そこで本研究では、設立当初から学校との関係性を模索・構築してきたNクラブに着目し、2011（平成23）年度に実施した「スポーツコミュニティの形成促進」事業の成果と課題を把捉することが目的となる。なかでも、Nクラブから当該地域の小学校に指導スタッフを派遣し、体育授業の補助を行う「小学校体育活動コーディネーター」展開への参与観察を実施し、関係者へのインタビュー調査をもとに、学校との協働関係構築を意図した総合型クラブをめぐる課題の諸相について言及してみたい。それらの作業から、上述した先行研究にみられる学校の学校外（地域）に対する意識の深層に迫るとともに、学校と総合型クラブ間の協働関係構築の可能性についても検討を加えたい。

１．研究方法

１）参与観察

Nクラブにおける「小学校体育活動コーディネーター」展開の実施者として、2011年9月から2012年2月にかけて参与し、観察を実施した。参与観察者は2名であり、1名は当該地域内のA小学校のコーディネーターとして、もう1名はB小学校にてコーディネーター補佐として関与した。

2校におけるコーディネーターの業務内容は、あくまでも体育授業担当教員の補助となる。週当たりの授業数は概ね10～20コマ（45分授業）程度である。また、体育授業前後の道具の準備、後片付けも行い、運動会時期には体育倉庫の整理をはじめ、運動会運営の補助業務も担当している。

体育授業担当教諭との関係は緊密であり、コーディネーターにおいては、主に「できない子ども」への個別指導を任される機会が多かった。また、体育授業の内容（単元教材）に応じた臨時講師を招聘する業務もコーディネーターの役割となる。特にB小学校においては、陸上競技「走り幅跳び」と「ボートボール」の授業時にコーディネーターにより臨時講師が招聘された。なお、A小学校では臨時講師の招聘機会はなかった。

２）インタビュー調査

ナラティブインタビュー法を用い、主に「小学校体育活動コーディネーター」展開の効果と課題に関する質問を施し、回答を求めた。調査対象者は、B小学校のコーディネーターC氏、B小学校の教諭2名（D教諭とE教諭）[注4)]、コーディネーターを派遣しているNクラブの事務局長F氏の4名である。インタビュー調査は2012年1月に実施され、各対象者に30～60分程度の時間を要した。

なお、B小学校のコーディネーターであるC氏は、スポーツ関連の専門学校を卒業後、2011年度よりNクラブの専属職員として雇用されている。「小学校体育活動コーディネーター」展開以外の時間帯は、Nクラブ事務局業務の他、女子硬式野球、少年バスケットボール活動の指導にあたっている。

各インタビューの内容は対象者の了承を得た上でICレコーダーにより録音し、後にテープおこしを実施した。

２.「小学校体育活動コーディネーター」展開の成果

ここではまず、「小学校体育活動コーディネーター」展開に伴う成果について言及してみたい。以下に採用した会話データはいずれもB小学校の関係者によるものである。

１）体育授業における専門性の向上

B小学校において、コーディネーターとして関与するC氏に「小学校体育活動コーディネーター」展開の成果を訊ねたところ、同校E教諭とともに実施した走り幅跳びの授業時の事柄をもとに回答が得られた。当該授業では、コーディネーターであるC氏により陸上競技の専門指導者が臨時講師として招聘され、B氏、C教諭とともに授業が実施されている。

C氏：高学年の走り幅跳びの授業だったのですが、専門の方が教えると「こういう段階を踏んで、最終的にはここまで持って行きましょう」という、教授法の段階が明確だと感じました。いままで、私自身もそうですが、E先生もまったくご存じなかった「道具」を用いることで、走り幅跳びのコツみたいなものを上手に子どもたちに伝えられていました。体育授業はさまざまな種目を行うわけですが、私自身、陸上のことはあまり知らないので、勉強になったし、子どもたちの関心の程度も大変高くなったと感じています。

C氏のコメントからは、専門指導者の招聘による体育授業の専門性の向上とともに、子どもたちの授業に対する関心の高まりが看取できる。

つぎに、当該授業クラスの担任であるE氏の会話データをみる。

E教諭：コーディネーターのCさんが居てくれること、そして適宜、専門の指導者の方に来ていただけることで、私たち専門的な知識を有していない者にとっては大変ありがたいと感じています。Nクラブの存在はなんとなくは知っていましたが、クラブからこういった形で学校の体育授業の支援が為されることに大変感謝します。

E教諭のコメントからは、B小学校をはじめとした多くの学校における体育授業の専門性確保をめぐる課題をみることになろう。また、校区内にある総合型クラブ（Nクラブ）の存在は少なからず認知されていたものの、今回の「小学校体育活動コーディネーター」展開に伴い、クラブ存在のメリットを見出す契機となりえたものと推察できる。

渡邊ほか（2005）は、「小学校と地域とが協働関係を築くためには、学校や地域の独自性を活かした活動や、住民も運営に関わる活動に取り組むことが重要である」とした上で、「地域と小学校を結ぶ人材や組織を通じて、信頼関係を築くことが必要である」と述べている。

当該地域における「小学校体育活動コーディネーター」展開は、まさしく「地域と小学校を結ぶ人材や組織」存在を明確にし、なおかつ学校と地域のスポーツクラブ間の信頼関係を築く機会になり得ていると把捉できよう。しかしながら、もう一つの参与観察校であるA小学校においては、体育授業の専門性向上を意図した臨時講師の招聘機会が得られていない。この点については、後の「小学校体育活動コーディネーター」展開をめぐる課題において論じることとする。

２）体育授業時の教員の負担軽減

以下の会話データは、B小学校における2名の教諭から得られたものである。

D教諭:担当教員だけではどうしても体育授業の準備が足りません。教師だけだと子どもたちだけで準備運動をさせておいて、その間にラインひいたり、道具を準備したりせざるをえません。コーディネーターの C さんがいてくれることで、休み時間、いや前の時間帯から準備をお願いできますので大変助かります。準備体操のときも、実は教師ひとりではすべての子どもに目が届きません。C さんがいてくれるとウォーミングアップが不足気味の子どものケアができもします。

E 教諭:体育の授業は、場の設定が大切です。まずもって安全な場を確保することです。走り幅跳びのときなどは、砂場がカチカチになっていました。臨時講師の方に来てもらえるし、ちゃんとした砂場にしておかなくてはと思っていましたが、C さんが事前にやってくれていました。(小学校の)教員はずっと担任のクラスみていますから、つぎが体育といっても十分な場の設定ができないことが多いのです。C さんのような方がすべての学校に配置されたら、ずいぶんと教員の体育授業に対する負担感は少なくなると思いますねえ(括弧は筆者による、以下同様)。

以上のコメントからは、体育授業のための十分な場の設定を行う時間の確保が困難であるという、B小学校のみに留まらない小学校における体育授業の問題点が看取される。こうした問題の解決、すなわち、体育授業時の教員の負担軽減も「小学校体育活動コーディネーター」展開の成果の一つであるといえよう。また、E教諭が発している「C さんのような方がすべての学校に配置されたら」との声からは、上述した成果の認識が、学校と学校外（地域）の連携関係構築へと発展する可能性みる。

３.「小学校体育活動コーディネーター」展開の課題

１）コーディネーターの立場をめぐる不明確さ

2011年9月からA小学校とB小学校に配置されているコーディネーターであるが、特にB小学校で活動しているC氏は、専門学校を卒業したばかりの20歳であること、また、教員免許を保有していないこともあり、教員との関係性の中で自らの立場をめぐる不明確さを感じている。

C 氏：私は、2 学期の運動会シーズンからコーディネーターとして関わり始めたのですが、先生たちにどこまで言っていいのか・・・、年齢的な問題もありますし。一応スポーツの勉強をしてきましたから、「ここはこういうふうにすべきなのでは」と思ってもなかなか言えません。先生方の（意識の）なかにも「今までこういうやり方でやってきているんだから」といったプライドみたいなものをお持ちですし。

一方で教員側からは、コーディネーターC 氏に対する“リクエスト”が発せられた。

E 教諭：私たちの体育授業に対するねらいとコーディネーターさん（C さん）の課題をすり合わせて、結果的に運動好きな子どもたちをつくっていけたらと思っています。もちろん、体力向上をめざすことも含めて。C さん、ほら言い難いのかもしれないけど「こういうことさせたいんですけど」ということがあまり出てこないので、もう少し言ってもらってもいいのかなと思いますね。

以上のことメントからは、コーディネーターの立場をめぐる不明確な状態に起因する葛藤の様相が看取できる。

A 小学校に派遣されているコーディネーターは、大学院生であり、教員免許（小学校）を保有している。また、翌年度からは小学校教員としての就職が決まっている立場もあってか、C 氏のような自らのコーディネーターとしての立場をめぐる不明確さや葛藤を抱くことはないという。むしろ、2 学期の途中からは、担任教諭と同等の立場で体育授業を担当する機会が与えられ、授業運営に関しても担当教諭との積極的な意見交換が為されている。

B 小学校における「小学校体育活動コーディネーター」展開をめぐる課題は、単順に C 氏と学校（教員）間のコミュニケーション機会の創造といった、限定的な解決策によって見出される類のものではないと思われる。

E 教諭ならびに C 氏のコメントからは、当該課題の真相に迫ることができる。

E 教諭：N クラブが C さんのようなコーディネーターを派遣してくれることは大変ありがたいことです。しかし、この派遣事業自体のコンセプトというか、趣旨が不明確だと感じています。子どもの体力向上を学校と N クラブで一緒に取り組んでいくのも良いし、運動に関心を持った子どもが出てきたら、放課後 N クラブで活動してもらえるように促してもらってもいい。C さんは体育授業の補助がメインで派遣してもらっているようですが、それだけでも十分助かりますけど、どうせこのような取り組みをやるのであれば、双方にメリットが出てくるようなものにした方がいいですね。まずはそういった話し合いの機会かな。

C さん：（コーディネーターの仕事としては）一応、ざっと上司に説明を受けました。「体育授業のサポートをしてください。あと体育倉庫の整理や休み時間は子どもたちと一緒に遊んでもらって」程度です。このコーディネーター派遣事業は小学校の体育授業の充実が使命だと私なりに考えていますが、私なりに子どもたちの体力を向上させることも大切な役割だろうと考え、昼休みとかは子どもたちを集めて「うんてい」をさせたりしてはいますけど。

すなわち、B 小学校における「小学校体育活動コーディネーター」展開は、コーディネーター、教員ともに、当該事業の趣旨が不明確な状態のまま遂行されているのである。

この点について、N クラブの事務局長である F 氏に訊ねたところ、「確かにコーディネーター、学校、クラブが一同に集まってこの事業展開の趣旨を確認するような機会は設けていません。私たち（クラブ側）にもこの事業は補助金事業だから次年度以降も継続して実施できるからわからないという不安感があったような気がしています。だから、まずは、試験的に小学校にコーディネーターを派遣し、その効果を学校とクラブが確認できればいいのかなぐらいに考えていました」との回答が得られた。

当該事業展開の主体者であるクラブ側の意向（思惑）に反して「小学校体育活動コーディネーター」展開は、学校側からの少なからずの期待感が寄せられはじめている状況にあるといえよう。今回看取するに至った B 小学校における教員とコーディネーターを取りまく葛藤は、今後の学校と学校外（地域）間のスポーツを通じた協働関係構築のゆくえを左右する重要な「出来事」なのではなかろうか。山田ほか（2006）は、小学校における地域の教育力を活かした活動発展の要件について言及し、学校と地域の関係性について以下のように論じている。「学校における地域の教育力の向上には、学校と地域間の協働関係が基本となる。学校と地域の双方が自らの役割を理解し、より充実した活動に向けたお互いによる主体的な取り組みが不可避となる」のである。

学校と学校外（地域）間のスポーツを通じた協働関係の構築を意図している N クラブの取り組みにおいては、「学校と地域の双方が自らの役割を理解」するためのしかけを施すことがまずもって肝要となろう。当該地域における「小学校体育活動コーディネーター」展開によって、いかなる協働関係を構築できるのか、いや、構築すべきなのか、に関するコンセンサスづくりが N クラブにとっての喫緊かつ重要なる課題であるといえよう。

２）学校外（地域）との関係性構築に慎重な学校

B 小学校において見出されることとなった課題に比して、A 小学校における「小学校体育活動コーディネーター」展開は順調にみえる。しかしながら、上述したように、A 小学校においては、派遣されているコーディネーターのみの体育授業関与に留まり、B 小学校にみられている臨時講師招聘の機会は一度もない。

A 小学校の校長は、「小学校体育活動コーディネーター」の派遣にあたっては、教員免許を保有している者のみを受け入れるとし、体育授業における専門性向上を意図した臨時講師の招聘を見送っている。

N クラブの事務局長 F 氏によれば、「同じ教員として（F 氏も中学校教諭）、A 小学校の校長先生のお考えは理解できます。大事な学校教育活動に教員以外の人が関与し、好ましくない指導が為された場合のデメリット感や危機意識みたいなものは教員、いや管理職である校長であればなおさらのこと、もたれるはずです」と言う。

B 小学校で見出されつつある「小学校体育活動コーディネーター」展開をめぐる体育授業における専門性の向上、教員の負担軽減といった成果に鑑みたとき、A 小学校をはじめとした他の学校にも数多くの学校外（地域）の人材が活用される状態を創造していくことが当該地域（N クラブ）における課題の一つといえよう。

５．結　語

本研究では、大分市野津原のＮクラブが 2011（平成 23）年度に実施してきた文部科学省委託「スポーツコミュニティの形成促進」事業に着目し、学校と総合型クラブ間の協働関係構築に向けた各種取り組みの成果ならびに課題の諸相を明らかにすることが目的であった。

当該事業への参与観察および関係者へのインタビュー調査により見出された成果と課題は以下の通りである。

1)「小学校体育活動コーディネーター」展開による成果としては、専門指導者の招聘に伴う体育授業の専門性向上がみられた。また、体育授業前の準備ならびに授業後の片付けといったコーディネーターによる補助業務に伴う教員の負担軽減が見出された。

2)「小学校体育活動コーディネーター」展開の課題としては、コーディネーターの立場をめぐる不明確さが一部見出された。そのことは、「小学校体育活動コーディネーター」展開を取りまくＮクラブと学校間の意思疎通の欠如に起因する課題であり、両者間の協働関係の構築をめざす際、克服すべき喫緊の課題であると思われる。また、学校外（地域）との関係性構築に慎重な学校の意向も一部確認された。

以上に鑑みつつ、Ｎクラブによる当該事業の意味と今後の学校と学校外（地域）間の協働関係構築の可能性について言及してみたい。

我が国における学校と学校外（地域）の関係性については、スポーツをはじめとして脆弱なものであったと言わざるを得ない。その背景および要因を検討する際、佐藤（1997、p.98-99）の見解は示唆に富む。佐藤は教員の仕事の特徴を「再帰性」「不確実性」「無境界性」であるとした上で、学校内の業務に留まらず、学校外との活発な関係性を意味する「無境界性」について、「無境界性は、恒常的な多忙を引き起こすだけでなく、（中略）その結果として教師の職業生活は色あせた無力感と無感動に浸り、ニヒリズムとシニシズムが漂うものになる」との意識が教師に抱かれ続けていることの問題性を指摘している。すなわち、学校（教師）は、学校外との関わり合いを半ば無意識的に拒絶しようとする風土を形成してきた可能性をみるのである。

では、スポーツを通した学校と総合型クラブ間の協働関係構築の動向にはいかなる意味が存在するのか。

谷口（2010）は、総合型クラブ育成事業に関与する行政と住民を対象としたフィールドワークの中から、以下のような結論を見出している。「総合型クラブ育成政策の出現は、固定化してきた地域スポーツをめぐる行政と住民の価値観や規範、思考の枠組みに『揺らぎ』をもたらし、なおかつ『揺らぎ』の出現に伴い、行政ならびに住民の地域スポーツ振興の価値観や規範、枠組みは再構築され始めている」と論じている。

「スポーツコミュニティの形成促進」事業をはじめとした「元気な日本スポーツ立国プロジェクト」政策は、学校と学校外（地域）の総合型クラブ間に協働関係を成就へと誘う「揺らぎ」となりえるのか。その鍵は、むしろ、総合型クラブからの学校に対する働きかけにあるといえよう。

今後の研究課題としては、Nクラブにおける当該事業展開の継続的な観察作業とともに、他の地域における類似事例への関与であると自覚している。

［本研究は、平成23年度科学研究費助成事業基盤研究（C）（課題番号23500740「学校と総合型地域スポーツクラブによる『新しい公共』の創出過程に関する研究」研究代表者谷口勇一）の一部である］

注

1）「スポーツ立国戦略―スポーツコミュニティ・ニッポン」は、今後の我が国のスポーツ政策の基本的方向性を示す目的から、2010年8月26日に文部科学大臣決定された。全文は83頁。
2）文部科学省施策目標 11-3「元気な日本スポーツ立国プロジェクト」説明資料より引用（http://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/1297422.htm）。
3）Nクラブが文部科学省に提出した事業計画書から引用した。
4）B小学校の教諭2名の基本的属性は以下の通りである。D氏は男性、53歳であり、教員歴27年、B小学校勤務1年目で2年生の担任を務めている。E氏は女性、50歳であり、教員歴28年、B小学校勤務6年目で4年生の担任を務めている。両名ともに、体育授業の専門性は高くないものの、それぞれ低学年、中学年の体育授業を担当している。

文　献

馬場宏輝、子どもの体力向上に関するスポーツ政策の変遷と課題―学校、家庭、地域モデル構築の検討―．仙台大学紀要39巻2号、2008、177-191.

佐藤学、教師というアポリア―反省的実践へ.世織書房、1997、98-99.

谷口勇一、「揺らぎ」の存する場所―コミュニティ形成が期待される総合型地域スポーツクラブをめぐって―.松田恵示・松尾哲矢・安松幹展編「福祉社会のアミューズメントとスポーツ―身体からのパースペクティブ」世界思想社、2010、187-201.

渡邊恵・藍澤宏・菅原麻衣子、小学校と地域との協働関係からみた活動の仕方と空間利用のあり方―小中学校の多様な活動に応じた教育環境整備の方法　その２、日本建築学会大会学術講演梗概集、2005、173-174.

矢花之宏・川西正志・北村尚浩・得永光彦、総合型地域スポーツクラブと学校・地域の連携プログラムの現状と課題.日本体育学会第58回大会体育社会学専門分科会発表論文集、2007、209-214.

山田将史・藍澤宏・菅原麻衣子、小学校における地域の教育力を活かした活動発展の要件―小中学校の多様な活動に応じた教育環境の方法　その３、日本建築学会大会学術講演梗概集、2006、319-320.

高齢者の昔語りの心理臨床的意義に関する研究

―「こころの生涯学習」を支援するライフレビュー面接―

医学部医学科医学基盤教育系医療人間科学群社会心理学講座　林　智 一

要約：高齢期には「自我の統合性 vs. 絶望」という心理社会的危機が優勢となる。自我の統合性とは、自身の唯一、1 回限りの人生を受け入れることである。そのためには、生育史の回顧を中心としたライフレビュー面接が有用であると考えられている。本研究では 3 事例を提示し、ライフレビュー活性化のプロセスや主要テーマなどについて検討を加えた。その結果、心理的に健康な高齢者も人生上の葛藤や心理社会的危機の解決を求めており、ライフレビュー面接が「こころの生涯学習」の一助となることが示唆された。

キーワード： 高齢者　　ライフレビュー　　生涯学習

Ⅰ．問題と目的

Erikson(1963)は、その個体発達分化の図式において人生を 8 つの段階に分けて、各段階に優勢となる心理社会的危機が存在すると述べている。すなわち、乳児期には「基本的信頼 vs. 不信」、幼児期には「自律性 vs. 恥・疑惑」、児童期には「自発性 vs. 罪悪感」、学童期には「勤勉性 vs. 劣等感」、青年期には「アイデンティティ vs. アイデンティティ拡散」、成人期には「親密性 vs. 孤立」、壮年期には「世代性 vs. 停滞性」、高齢期には「自我の統合性 vs. 絶望」という危機が優勢になるという。

ここでは本論のテーマと関連の深い、高齢期の「自我の統合性 vs. 絶望」について紹介しておく。自我の統合性とは、自身の唯一のライフサイクルをそうあらねばならなかったものとして、またどうしても取り替えを許されないものとして受け入れることを言う。死という自らのライフサイクルの終焉を前にして、そのような感覚が得られなかった場合、高齢者にとってはもはや人生をやり直す時間もなく、残されるものは「絶望」だけになってしまうのである(Erikson, 1963)。

このようなライフサイクル各期の心理社会的危機について学び、その解決に向けて取り組んでいくという、臨床生涯発達心理学の視点は、こころの健康な成長や発達、成熟のために不可欠である。したがって、生涯に渡って主体的に学習すべき課題であり、生涯学習の１つの重要なテーマとなりうるものと考えられる。ここでは、個人のライフサイクルを通じたこころの成長や発達、成熟に関する生涯学習・生涯教育のことを「こころの生涯学習」と呼ぶこととする。

そのためには、臨床生涯発達心理学について知るという認知的学習だけでなく、自身の問題として、いかに自分の人生の過去、現在、未来と向き合い、人生の肯定的側面、否定的側面の両面を統合して受け入れ、自我の統合性の感覚を獲得するかという実際的課題も存在する。したがって、「こころの生涯学習」には、カウンセリングや心理療法などの心理

臨床学的援助による心理社会的危機への取り組みという体験的学習も不可欠となる。

そこで注目されるのがライフレビュー（life review）である。高齢者が自己の人生について昔語りをすることを好むことは、体験的にもよく知られている。だが、かつては「老いの繰り言」と呼ばれたり、認知症と関連づけて考えられたりするなど、高齢者の昔語りは否定的にとらえられがちであった。

一方、アメリカの老年精神医学者 Butler(1963)は、ターミナル期や高齢期など人生の終末期に近づき、死を意識することで、パーソナリティの再統合を求めて過去の回顧が活性化することに注目した。そして、このプロセスをライフレビューと名付けた。ライフレビューが適応的に進展した場合には、より妥当な状況把握がもたらされ、人生に新たな有意義な意味が付与されるという。それは不安を軽減し、人に死への準備をさせると Butler は述べている。すなわち、適応的なライフレビューは、究極的には Erikson(1963)の言う「自我の統合性 vs. 絶望」の危機の解決をもたらすのである。

ところが、わが国では認知症高齢者に対する集団回想法の研究が大半を占め、高齢者に対する個人心理療法としてのライフレビュー研究は極めて少ないのが現状である。たとえば、心理臨床学関連のジャーナルも含む、国内の医学関連データベースである『医中誌 Web』で「ライフレビュー」と「個人心理療法」をキーワードに検索すると、ヒットしたのはわずか 2 件（林, 1999; 林, 2000）であった。

そこで本研究では、地域に住まう認知症のみられない高齢者を対象とした 5 回のライフレビュー面接を臨床心理士である筆者が実施し、典型的な 3 事例をもとに、ライフレビューの展開プロセスや主要テーマ、その効果などを中心に事例研究的に分析を行った。そして、心理的に健康な高齢者に対するライフレビュー面接の心理臨床的意義を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．方法

1．被験者

通所デイケアを利用する、あきらかな認知症がなく、疎通性の良好な、心理的に健康と思われる高齢者を某介護老人保健施設より推薦してもらった。その方々に研究の趣旨を文書と口頭で説明の上、協力を依頼し、同意の得られた方々にライフレビュー面接を実施した。本研究ではそのうち 3 名の事例を報告する。3 名の被験者はいずれも 80 歳代の女性であるが、これはこの施設の利用者自体に後期高齢者の女性が多かったためである。

2．面接構造

老人保健施設内の面接室を用いて、原則として週 1 回 50 分の個人面接を計 5 回、対面法により行った。

なお、5 回という面接回数は、カウンセリングのトレーニング法の 1 つで、健康なクライエントに 5〜10 回のカウンセリングを試みるという「試行カウンセリング」(鑪, 1977)のアイデアを参考にしたものである。これは、カウンセリングのプロセスが展開する最低限の回数であると同時に、心理的に健康な被験者から深刻な問題や病理的問題を引き出してしまう危険性も少ない回数であり、本研究で行うような健康な高齢者に対する面接には適切なものであると考えられる。

3．ライフレビュー面接について

ライフレビュー面接とは、力動的個人心理療法にライフレビューの観点を導入した、筆者独自の方法である（林, 2003）。面接では生育史の聴取が中心となるが、あらかじめ質問項目を設定した構造化された面接ではなく、被験者に自発的回想が想起したとき、面接者が積極的にそれに関心を示すという方法をとっている。また、過去の話題のみに限定せず、被験者から現在の問題や将来への不安、希望など多様な話題が語られた際には、それらの話題についても傾聴した。なお、＃1 はインテイクシートを利用して家族歴、生育史について面接者から尋ねている。

Ⅲ．事例の提示

1．事例 A

⑴家族歴・生育史

80 歳代前半の女性、A さん。実家の両親は「大地主」で、8 人同胞の第 4 子として生まれた。医療系の学校を卒業後、医療職に就いていた。20 歳代前半に夫と恋愛結婚をしたが、夫は「貧乏」だったため、実家の両親は大反対であった。結婚後は専業主婦となり、3 人の子どもをもうけた。約 20 年前に農業を営んでいた夫が死去してからは、息子夫婦と同居している。

⑵面接経過

＃1　A さんの実家は「大地主」で、使用人もおり、別荘も持っていたと言う。子どもの頃から同じ服を 2 日と着ることはなかったそうである。大きな蓄音機でレコードをかけて踊ったりするのが好きだったと、幼少時の思い出が語られた。高等小学校卒業後は、医療系の学校に進学し、医療職に就いたと言う。20 歳代前半に夫と恋愛結婚したが、夫は貧乏だったので両親から大反対されたそうである。なお、恋愛結婚のいきさつを語りながら、「恥ずかしいわ」と照れる A さんの姿が印象的であった。現在は息子夫婦と同居しているが、息子の嫁は職に就いているので、A さんが家事を担当しているそうである。孫たちの子守もしてきたためか、孫はみんな A さんに優しくしてくれると言う。

＃2　A さんの住まう地域も昔は土葬だったという話題から、夫の死について語られる。夫が亡くなった約 20 年前は火葬だったが、夫の四十九日後、お骨をお墓に納めてから寂しさを感じるようになったと言う。＜お骨でも家にいてくれるのとお墓にいるのとでは違うのですね＞という面接者の言葉にうなずく A さんだった。そして、急に話題を変えるかのように、祖先が有名な神社の宮司であったというエピソードが語られた。このことから、いまだに亡き夫について語ることには抵抗があるように面接者には推察された。

＃3　前回に続き葬儀の話となり、夫が亡くなったときには「夫の仕事関係の人や近所の人、さらに呼んでいない人まで 500 人が集まった」と言う。夫は「呑み助（酒が好きな人）」だったので参列者に焼酎を持って帰ってもらった、と言って A さんは笑う。夫が酒を飲み出したきっかけは転職で、新たな職場では酒を飲む機会が多くなり、夫は飲酒運転のため

に何度も自動車事故を起こしたと言う。面接者がAさんに飲酒運転の話題についてさらに尋ねると、「思い出したくない」と最初は拒否されたが、やがて自分から「しまいには夫はアルコール中毒になっていた。酔って暴れたりした」という事実を語り始めた。そして今回も急に話題を変えるかのように、実家の思い出や、18歳から20歳くらいの医療職に就いていた頃が一番、充実していたというエピソードが語られた。また、父親の夢を見たと言って、「父が山の上にいて、その下の方を母が歩いている。父が“婆さん（Aさんの母）が歩いて上れるように階段を作ってやれ”と言う夢」が語られた。さらに、「ナスビがいっぱいあって、龍が厚い雲の間を上っていく。そこだけ雲が晴れて青空になっている」という夢も報告された。なお、父と母が山に居るという夢は、柳田(1945)の、先祖の霊が山にあって子孫を見守っているという祖霊観を面接者に連想させたので、＜お父さんがご先祖様として山の上から見守ってくれていて、後から亡くなったお母さんもご先祖様になっていく途中なのですね＞と伝えた。また、龍の昇天の夢は、Aさん自身の昇天、すなわち死のイメージのように思われた。

＃4　先週、両親の夢の話をしたのをきっかけに、実家に両親のお参りに行ってきたことが報告された。＜それで、どんな感じがしましたか？＞と感想を問うと、理由はよくわからないが「なんだかすっきりしました」とのことであった。次いで子育ての話題になり、まだテレビもない時代だったので、Aさんはよく子どもたちに本を読んでやったりお話しをしてやったりしたと言う。そのせいか子どもたちは話し上手になり、学校で朗読の代表に選ばれたり、長じては本を出版したりした子どももいるそうである。Aさん自身も読書が好きで、今は「iPad」で中国語を勉強したり電子書籍を読んだりしてみたいとも語った。一方、嫁は仕事で忙しいので、夕食のおかずはAさんが作ることが多いと言う。＜Aさんが居てくれるから、お嫁さんも働けるんですね＞という面接者の言葉に、笑顔になるAさんだった。

＃5　嫁が出張のおみやげにAさんにバッグを買ってきてくれたという話題がうれしそうに報告された。嫁は高齢者とかかわる仕事をしているから、「年寄りの扱い方がわかってきたのだろう」と言って笑われた。面接者が、＜Aさんが留守を預かってくれるお礼かも知れませんね＞と伝えると、「夕食はほとんど作る。私の作るカボチャのサラダは美味しいよ」とうれしそうに語られた。次いで、計5回に渡る面接への感想を問うと、「ここでは人に話したことのないことを話してすっきりした。家では昔のことを話しても誰も聞いてくれないので楽しかった」と答えるAさんだった。なお、このセッション中に面接者の年齢を尋ねられたので、年齢を伝えた後に＜私はいくつくらいだと思っておられましたか？＞と質問すると、「34，5かと思っていた」と言われた。ちょうどAさんの孫の年代のように面接者を見ておられたことがわかった。これは陽性転移の表れであると思われる。また、老人保健施設で出会った友人たちに、Aさんが趣味で作っているビーズのアクセサリーをプレゼントして喜ばれたことや、老人保健施設で行われている作品展にもビーズ手芸の作品を出品したといった、肯定的な話題で面接が締めくくられた。

(3)面接の心理学的理解

A さんの面接では、家族歴や生育史を問う中で比較的、早くから自発的回顧が見られた。ただ、それは幸福な子ども時代や結婚のなれそめまでであった。＃2 で、夫の死についても回顧されていくが、途中で急に話題を変えてしまわれたのである。そこには何らかの抵抗の存在が推察された。

そして＃3 で、夫がアルコール依存であったという、A さんが回顧することに抵抗を生じても当然と思われる否定的な話題が初めて回顧された。この抵抗は、面接の場や面接者に対する信頼感が回を重ねるごとに高まっていったことにより低減していき、＃3 で回顧が可能となったものと考えられる。こうして、夫の肯定的側面と否定的側面の両方が統合されていったのである。なお、いきなり否定的な話題を語るのではなく、面接者と慎重に信頼関係を築き、抵抗を解いていくという態度は、A さんの心理的健康さの表れとも言えよう。

さらに、ここには、過去が「想起」されると、その内容が自我によって「評価」され、洞察による記憶の修正やさらなる追加的記憶の「想起」とさらなる「評価」が繰り返されて、最終的に肯定的側面と否定的側面の両面が「総合」され、そのバランスから自我の統合性か絶望かが決定されるという Webster & Young(1988)のライフレビューの 3 段階モデルが明瞭に見て取れる。

また、A さんの報告された亡き両親の夢は、興味深いものであった。面接経過で考察したように、両親が祖霊に近づいていること、すなわち喪の仕事の完了を示す夢のようである。実家の両親の話題を回顧していく中で、無意識水準でも回顧が活性化し、それが夢という形をとって表れたものと推察された。さらに、その夢が報告された直後に、実際に両親のお参りに行ったという＃4 のエピソードは、面接を通じての回顧や夢がいかに A さんに強く影響していたかということを示唆している。このことからも、これらは単なる回想ではなく、ライフレビューであったと考えられよう。

次いで報告された龍の昇天の夢は、A さんの死に対するイメージを象徴しているかのようであった。それは荘厳で神聖なイメージであり、そこに死への恐怖などは感じられない。無意識水準では、すでに自身の死を予感し、死を受容しているかのようでもあった。

そして、＃4、＃5 と面接も終盤に近づくにつれて、今度は現実的な話題が登場した。しかも、留守を預かって家事を担当しているという自身の有能感や、現在の楽しみである趣味のビーズ手芸、友人関係の充実といったエピソード、さらには「iPad」のような最新機器を使ってみたいという将来への希望など、肯定的な話題ばかりであった。5 回の面接をこのような肯定的話題で統合的に締めくくられたことからは、A さんがライフレビューによって過去に浸る中から、再び現実の世界へと立ち戻ってくるプロセスもうかがわれた。以上より、A さんは 5 回という限られた回数の面接を有効に活用されたものと考えられる。

2. 事例 B

(1)家族歴・生育史

80 歳代前半の女性、B さん。父は製材業に従事し、10 人同胞の第 4 子として生まれた。きょうだいが多くにぎやかな家庭だったが、父はしつけに厳しく、女の子には茶道、華道、裁縫を習わせた。20 歳代前半に見合い結婚し、以後は専業主婦。夫婦は「トリコトリヨメ（夫婦養子）」で、2 人の子どもたちが独立後は会社員だった夫と 2 人暮らしである。夫

とは、「亡くなってもまた一緒になろうね」と言い合っているくらい仲が良い。

⑵面接経過

＃1　当初は実家の両親の思い出が中心に語られた。両親はしつけや習い事などに厳しかったが、B さんはそのことに感謝しており、「親の自慢だけはできます」と笑う。約 10 年前に脳出血で手術をした後、後遺症で右手や右足がつるのだと言う。医師からは“それくらいですんで不幸中の幸いだ”と言われたが、B さん自身は、病前には器用だっただけにその分、よけいに体が不自由になったと感じるようであった。そして、人からは“軽い後遺症で良かった”と言われて、その辛さがわかってもらえないのが悔しいと語った。一方、家事はこなしており、夫婦仲も良いと語る。夫婦は「トリコトリヨメ」で、見合い結婚だったと言う。

＃2　お正月後の面接のため、初詣などのお正月の行事の思い出が語られた。孫や息子夫婦からお年玉をもらったと、うれしそうに話された。現在は夫婦 2 人の生活だが、息子が週 1 回は様子を見に来てくれると言う。また、B さんは買い物の時、子どもたちにお菓子は 1 品だけを買い与えるようにしていたそうだが、ひ孫と買い物に行ったときに、幼いひ孫が自分から“ひいばあちゃん、ひとつ（お菓子を）買ったからもういい”と言ったという。面接者が＜B さんの教えが子どもたちを通じてひ孫まで伝わっているのですね＞と伝えると、B さんは「（子や孫、ひ孫が）かわいいのはみんな一緒だろうが、しつけも大事だから。そういうしつけを身につけておけば、いつかは役に立つ」と語った。さらに、自分が両親から習い事をさせられたように、自分の娘にも茶道や華道を習わせたが、今では娘もそのことに感謝していると言う。一方、脳出血の後遺症のことが再度話題になり、B さんは「どうしてこうなったのかと思う。話していると涙が出る」と言って落涙された。

＃3　子育てに苦労はなく、“子どもたちはみな素直に育ったね”と夫と話していると言う。ただ、B さんが産後 1 週間、働きたくても働けず寝込んでいたら、自分には出産経験がなかったためか、姑から嫌味を言われたという。また、3 歳のひ孫と一緒に出かけた際に、少し離れていると、“ひいばあちゃん、動きなさんなよ。私が行くから”と、脳出血の後遺症がある B さんをいたわってくれたと言う。面接者が夢について尋ねると、「同じような夢をよく見る。獣に襲われて、恐ろしい夢」と答える。面接者から、＜恐ろしいものに襲われる。恐ろしいものとは、病気の後遺症のことなのでしょうか？＞と連想を伝えると、「そうかもしれない。ふだん、後遺症のことは他人に気づかれないように気を使っている」と言う。

＃4　自分がひどい姑に苦労したので、子どもにだけは同じ苦労をさせたくないと語る。ところが一方で、B さんの子どもが小さいときは姑に子守してもらって助かったという思い出も回顧される。また、若い頃、農作業のことを何も知らない B さんが姑から“こんなことも知らないのか”と嫌味を言われると、“おばあちゃんの年になったら出来るようになる”と、言い返すこともあったと言って笑われた。息子の嫁や孫のやさしさが語られ、B さんが作る「おはぎ」は息子や孫の好物で、喜んで食べてくれるのがうれしいとも言う。

さらに、夫が以前、病気で入院したときには、息子が“親が長生きしてくれるのが一番うれしいことだから”と言って、治療費を全額負担してくれたという話題を笑顔で語るBさんであった。

＃5　面接者から計5回に渡る面接に対する感想を問うと、「我ながら（昔のことを）よく覚えているなと思った」とBさんは笑顔で答えられた。そして、現在、一緒に散歩をする友人と“若い頃は仕事や子育てで忙しかったが、今は幸せだ”と語り合っていると言う。＜いつ頃が一番、大変でしたか？＞という面接者の質問に対しては、「結婚から10年くらいですね。若いときの苦労は買ってでもしろというが、それは本当だと思う。年を取ってから幸せなのが良い」と語る。そして、脳出血を患う前は器用だったので、お祝い事に使う「水引（みずひき）」作りが上手でみなから喜ばれたという思い出などが話された。このような話題も、以前のように辛そうな表情ではなく語られたことから、＜最初は病気の話をされるとき辛そうだったが、今回は病気の話をしても辛そうな感じがなくなりましたね＞と、面接者の印象を伝えてみた。すると、「受け取り方が大事だと思うようになった。良い方に良い方に取るのが一番。嫌なことも自分の勉強だと思えば、いろんなことに腹が立たないようになる。自分の思いを変えないといけない。あれ（病気）もひとつの勉強」だと、笑顔で語られた。そして、先日亡くなった知人は亡くなる前日まで畑に出ていたという話題から、「自分も前の日まで仕事をして、コロッと逝ければ良いけど。年のせいかな、若い頃は忙しいばっかりでこんなこと考えなかったが」と、自身の理想の死について話して、面接を締めくくられた。

(3)面接の心理学的理解

＃3ではひどい姑であったと言い、嫌味を言われた話題などが語られていたが、次の＃4では姑が子守を手伝ってくれて助かったという思い出も回顧されている。Webster & Young(1988)の3段階モデルに照らしてみると、まず「想起」が活性化し、次いで「評価」の段階で洞察による記憶の修正や追加的記憶の呼び出しがなされて、否定的側面だけではなく、肯定的側面も想起されるようになり、両者が「総合」の段階で再統合されていくという、ライフレビュー・プロセスの典型例であろう。

また、毎回のように語られたのが約10年前からの脳出血術後後遺症についてである。Bさんは当初､後遺症の話題を口にするだけで落涙したり辛そうな表情になったりするなど、障がいを受容できないでいるようであった。

ところが、＃3にみられた3歳のひ孫までが後遺症のある自分をいたわってくれるという話題など、子、孫、ひ孫の自分に対する優しさが語られるにつれて、後遺症に対する見方が変化し、＃5では「病気も受け取り方が大事」だと言う心境に変化している。そこには、＃3に報告された夢の話題に見られたように、いかに自分が後遺症を気に病み、怖がっているかということをあらためて自覚し、直面化したことなども影響していよう。

さらに、姑への見方に見られた、過去の受け取り方の変化や視点の移動の影響もうかがわれる。すなわち、過去の見方が変化することと並行して、障がいという過去から現在、未来に渡る問題への見方も変化していったのである。この点もライフレビューの効果として興味深い。過去の回顧ばかりにこだわるのではなく、現在や未来の話題にも傾聴する本

法での面接者の姿勢の重要性が示唆されよう。

本事例では面接経過を通じて、子、孫、ひ孫の優しさが一貫して語られていた。B さんにとって、子、孫、ひ孫との心理的紐帯が重要な支えになっていることがうかがわれると同時に、この話題は子育ての成功感や達成感にもつながり、世代性の感覚や自らの有能感を高める話題でもあったのだろう。さらに、子どもの存在は自らの象徴的不死性の様式の１つでもある(Lifton, 1976)。我々は、子孫を通じて、その中に“生き続ける”という不死性の感覚を感じることができるのである。

なお、これらの経過を経て、＃5 では「今はしあわせ」で「病気も受け取り方が大事」と語ったように、肯定的話題で締めくくられている。B さんは 5 回という限られた回数の面接を有効に活用されたものと考えられる。

3. 事例 C

⑴家族歴・生育史

80 歳代後半の女性、C さん。農業を営む両親のもと、6 人同胞の第 4 子として生まれた。C さんの幼少時に父が病死し、母が 1 人で農業を続けた。医療系の学校を卒業後、医療関係の資格を 3 つも取得して病院に勤務した。20 歳代前半に公務員の夫と見合い結婚して退職し、2 人の子どもをもうけた。40 歳代に医療職として再就職して定年まで勤務した。約 10 年前に夫が死去してからは、娘夫婦と同居している。

⑵面接経過

＃1　C さんの幼少時、父は酒を飲んでケガをしたのが原因で死去したと言う。母は子どもを育てるために 1 人で農業を続けたそうである。C さんが医療職の資格を 3 つも取ったということに面接者が感心すると、「成績はビリだったが、一晩中勉強してビリでなくなった。努力はするほう」だと語る。現在は同じ敷地内に娘夫婦が家を建て、家事や仏壇の世話などは娘が担当しているそうである。「今の生活はしあわせなほう。不平を言えばきりがないが、こらえないといけないかな」と言うので、＜どんな不平がありますか？＞と尋ねると、脚が悪いのでポータブルトイレを自室に置いているが、娘に悪いので自分で始末していると語る。できれば娘に頼みたいが、C さんは遠慮を感じているようであった。＜自分の娘でも気を遣う面があるのですね＞と面接者から伝えると、同意される C さんであった。

＃2　子ども時代は「普通の子」で、父が早世し母 1 人だったので弟たちの世話はよくしたと言う。医療系の学校には奨学金で通い、3 つの資格を取得したそうである。結婚退職したが、40 歳代に医療職として再就職し、定年まで勤務したと語る。＜家事と仕事の両立はどうでしたか？＞と尋ねると、「夫が家事は大目に見てくれた」と C さんは笑っていた。当時は洗濯機もなく、洗濯板で洗濯したり、食料品店も近所に 1 軒しかなかったりして、不便だったと言う。「昔の人は体を惜しまず働いた。風呂は薪で沸かし、遠方でも歩いて行った」と、当時の思い出を語った。夫の死去後、娘夫婦が同居することになったが、娘は「特に優しいとも思わない。普通」だと言う C さんであった。また、夢について面接者から尋ねると、「ゲートボールをする夢。私は強かった。とくに 64，5 歳の頃が上手だった」

と語る。

＃3　2 人の子どもの子育てには苦労はなかったと言う。病気もせず、勉強もしてくれたそうである。「今、考えると、学校の成績と生活は違いますね。（学校の成績は良くなかった）下の娘のほうが生活はうまい。（学校の成績が良かった）上の子のほうが人間としての務めは下手」だと言う。＜人間としての務めとは？＞と尋ねると、友達づきあいなどだと語る。また、C さんの仕事について尋ねると、「平々凡々な生活。でも、やりがいはあった。みなさんが挨拶してくれ、敬語で話してくれた」と言う。さらに、「神無月、出雲に神様が集まって、“C は年だから、この世から旅立たせた方が良い”と相談している夢」を見たそうである。目が覚めて、「“90 歳近くにもなれば、無理ないなぁ”と思った」と言って笑う C さんであった。

＃4　甘い物は糖尿に悪いとか、塩辛い物はタンパクが出るとか、健康のために食べ物のことが気になるが、内心は長生きしては悪いという気持ちがあるそうである。一方、少し熱があるとすぐ医師に薬を出して欲しいと言うので、医師からは“死にたいというのは嘘だろう”と、笑われるのだと言う。ここ（老人保健施設）では楽しく過ごし、友達とは“納骨堂に一緒に入って、次の世も一緒にいようね”と話しているそうである。現在、娘は、職を持つ嫁に代わって孫（C さんにとってはひ孫）の世話にかかりきりになっていると言う。だが、C さんは「家族で干渉し合う家庭は長続きしない」と考え、娘には干渉しないようにしているそうである。家族の間でも「こころの屏風を立てていた方が良い」と語る C さんであった。

＃5　「神無月の夢」を見てから、朝起きたとき、“今日も目が覚めて生きているわ”と思うそうである。一番楽しかったのは、老人会や婦人会などで旅行していた定年後から、脚が悪くなる 74，5 歳くらいまでだったと言う。＜では一番、辛かった時期は？＞と尋ねると、若かった頃は戦後の物のない時代で苦労が多かったが、辛いとは思わなかったと語る。また、昔はとても可愛い「お座敷犬」を飼っていたが、5，6 年前に亡くなったと言う。動物専門の火葬場で焼いてもらい、お墓まで作ったそうである。「家族のようで、亡くなってしばらくは寂しかった。またイヌを飼いたいと思うのだが、娘は“お母さんが先に亡くなったらイヌがかわいそう”だと言って、飼わせてくれない」と言う。計 5 回に渡る面接に対する感想を問うと、「忘れていることが多い。敗戦前後のことが一番、話すのが辛かった。思い出したくないことも思い出した」と語る。＜ここでもこころの屏風がありましたか？＞と、前回、C さんの使われた言葉をもとに面接者が尋ねてみると、「そんなことはない。話しやすかったです」と言って面接を締めくくられた。

(3)面接の心理学的理解

＃1、＃2 では、家族歴や生育史に関する面接者からの質問に答える中で、徐々に自発的回顧も生じ始めた様子であった。ここには、面接早期に Webster & Young(1988)の 3 段階モデルが展開し始めた様子がうかがえる。C さんにおいては、過去については、おおむね統合されているようである。

そして、＃3 で報告された「神無月の夢」以降、回顧と並行して死に関する話題が繰り返し表れるようになる。長生きしたい気持ちと、長生きしては周囲の人に悪いという気持ちが交互に語られ、死に対して葛藤的な感情を有しているようであった。死はタブー視されやすい話題であろうが、C さんにとっては夢にまで表れる重要なテーマとなっていたのである。

この「神無月の夢」は、出雲に集まった神々が“C は年だから、この世から旅立たせた方が良い”と相談しているという内容である。この夢は、人の寿命というものが人知を超えた､神の領分であるとCさんが感じていることを示す夢のように面接者には感じられた。また、C さん自身、自分の死が近いことを無意識水準で感じており、この夢を契機としてより明確に死を意識化したものと推察される。

しかし、＃5 では、神無月の夢を見てから、朝起きたとき、“今日も目が覚めて生きているわ”と思うのだと語られた。すなわち、死の存在を意識すればこそ、今、生きていることの喜びや不思議をより一層、実感するようにもなっているのである。

これは、死に対する否定的側面と肯定的側面が再統合された姿ともとらえられよう。死に対する葛藤は葛藤として抱えながらも、生を楽しもうという姿勢が C さんには感じられた。たとえば＃4 での「次の世も一緒にいよう」と語り合うという老人保健施設での友人関係の話題には、来世、すなわち死を意識しながら現在の良好な関係を楽しんでいる姿が垣間見られ、また＃5 でのイヌを飼いたいという話題には、将来への希望を見ることができる。死を意識したからといって、決して死の観念にとらわれて死を恐れるばかりではなく、現在を楽しみ未来に希望を抱く C さんの態度は、自我の統合性を獲得して心理的に健康な高齢者の、死に向き合う姿勢の一典型であるように思われる。

なお、計 5 回に渡る面接に対する感想では、「敗戦前後のことが一番、話すのが辛かった。思い出したくないことも思い出した」と語っておられ、C さん自身も思いがけず回顧してしまったことに、多少の戸惑いもあったようである。面接で話しすぎたと感じる気持ちの中には、同居している家族との間にも「こころの屏風」を立てて、干渉しすぎないことが一家の平穏につながるという､C さんの独自の考え方も影響しているのかもしれない。おそらく面接者との間にも距離を保っておきたかったのだろうが、C さんが思っていた以上に話してしまった、ということなのだろう。

本研究では、被験者のペースや独自性に可能な限り配慮してライフレビューを進めることを原則としていた。だが、この言葉からは、5 回のみの回数の限られた面接ということで、面接者のほうがライフレビューを被験者に強要するような態度に陥るという危険性について、改めて考えさせられた。ただ、面接の最後に語られた、ここには「こころの屏風」がなかったという C さんの言葉から、話しすぎたという不満よりも、しっかり話せたという満足感のほうが大きかったこともうかがわれよう。

Ⅳ．総合考察

1．ライフレビュー面接の活性化プロセス

3 事例の面接経過を総合して見ると、＃1 が家族歴や生育史の聴取を中心としたインテイク的､半構造的面接だったこともあり､面接者の質問に対して回答する形となっていた。その中から徐々に自発的回顧も活性化し始めた。経過の中盤からは自発的で自由な回顧が

増え、内容的にもこれまで他者に話せなかった話題など、より内面的な回顧となっていたように思われる。そして、面接の終盤の＃5 には、回顧にせよ現状の話題にせよ、肯定的内容で面接が締めくくられていた。

事例により活性化の仕方やピークの時期は多少異なるが、このプロセスを横軸に時間、縦軸にライフレビュー活性化の度合いをとって図式化すると、おおむね図 1 の実線の曲線のようなイメージとなろう。まず、家族歴や生育史の聴取に答えるかたちで徐々に自発的回顧が始まる「インテイク期」、次に自発的回顧が増え、さらに追加的記憶が想起されて、総合されていく中盤の「活性期」、そして面接終盤に至り、ライフレビューから現実的話題に戻っていく「収束期」という 3 期に分けられる。

また、3 事例とも活性期の＃3 に夢が報告された。これは無意識水準でも過去の回顧や心理社会的危機が活性化し、夢という形で意識水準に表れたものと考えられる。それが図中の点線の曲線部分である。

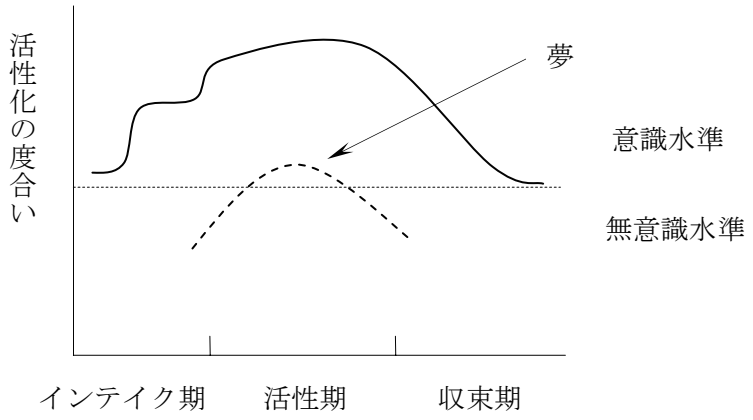

図 1　ライフレビューの活性化プロセス

2. ライフレビュー面接の主要テーマ

(1)家族との関係

原家族や現在の家族との関係は、当然ながら過去を回顧する中で主要テーマとなっていた。とりわけ 3 事例ともに子、孫、ひ孫らとの肯定的関係が話題となったことが注目される。子どもらとの絆が現実的にも心理的にも支えになっているようである。

子、孫、ひ孫の優しさや彼らとの良好な関係は、子育ての成功感や達成感にもつながり、世代性の感覚や自らの有能感を高める、人生の肯定的側面に関する話題である。したがって、これは自我の統合性の感覚を高めるものとなろう。

また、事例Ｂに顕著であったが、子、孫、ひ孫にいたわられたり世話されたりすることが喜びとして語られていた。本研究の被験者がいずれも 80 歳を越えており、なんらかのかたちで他者からの援助を必要とする年代にさしかかっていることは事実であるが、誰もがそのような世話をスムーズに受け入れられるわけではない。

Erikson, Erikson & Kivnick(1986)は、親や祖父母として自分が他者の世話をするだけではなく、自らが若い世代からの世話を受け入れることで、自分たちの世話をしてくれる若い人々の中にある世代性の感覚を強化する役割のことを、祖父母的世代性と呼んでいる。したがって、

本研究の被験者はこのような祖父母的世代性を獲得した高齢者であると考えられる。このことはまた、被験者の心理的健康さの証左であるとも言えよう。

さらに、子、孫、ひ孫といった子孫の存在は象徴的不死性の様式の 1 つであり(Lifton, 1976)、それが死への準備や死の受容を促進していることも推察される。

このように、子、孫、ひ孫は現実的なサポート源であるのはもちろんのこと、彼らとの心理的紐帯が高齢者にとっての重要な心理的サポートともなっているのである。

(2)夢

3 事例ともに面接経過の中盤、ライフレビュー活性期に夢が報告された。前述のように、夢の出現は無意識水準でもライフレビューや心理社会的危機が活性化していることの表れであると考えられる。同時に、ライフレビュー面接に表れる夢は過去の回顧をより進展させ、自らの死の問題など心理社会的危機を意識化させるものでもあった。したがって、ライフレビューと夢は、いわば相互促進的関係にあると言えよう。

夢の象徴的解釈については、学派や理論により多様な立場があろう。だが、ライフレビューを意図した面接においては、面接者が解釈することよりも、被験者が夢についての感想や連想と自発的回顧を自由に語れること、すなわち被験者のナラティブを重視する姿勢が有用であった。

(3)死

3 事例とも、両親や舅・姑、夫などの死が話題となった。事例Aでは、亡き両親の夢が報告された後、実家に両親のお参りに行ったという。それほどに印象的な夢であったということであり、また無意識水準で亡き両親に関する回顧がそれだけ活性化していたということが推察される。さらに、事例 B では理想の最期が語られ、事例 C では夢を契機として自らの死についても語られた。

死はデリケートな話題であり、被験者からタブー視されやすいテーマであるが、5 回という少ない面接回数の中でも話題にのぼっていることから、この年代の被験者にとっては避けて通れないテーマであることがわかる。

なお、被験者だけでなく、面接者側の逆転移として、死や老いに不安を覚え、そのような話題を回避してしまう危険性のあることが指摘されている(Knight, 1996)。臨床心理士に限らず、高齢者と接する専門職においては、このような自身の逆転移に関する分析が不可欠である。

3. ライフレビュー面接の効果

「人に話したことのない話題を話してすっきりした」という事例 A の発言に代表されるように、3 事例ともライフレビュー面接に対しておおむね肯定的な態度であったことが感想からうかがわれた。家族や知人にはなかなか話す機会のない思い出を回顧し、傾聴してもらうという体験は、日常の中では得がたいもののようである。そのような貴重な機会として、ライフレビュー面接は被験者に活用されていた。

とりわけ興味深い点は、心理的に健康な高齢者であっても、それぞれに人生上の未解決の葛藤や心理社会的危機に関連するテーマを面接の中で語っていたことである。事例Aで

は亡き夫への葛藤的な思いであり、事例Ｂでは脳出血術後後遺症の悩みであり、事例Ｃでは自身の死や長生きすることへの葛藤であった。そして、各事例とも、面接経過を通じて葛藤の解決や自我の統合性の感覚の強化など、一定の効果が見られていた。

以上から、明らかな悩みや不安を有する臨床群だけでなく、今回の被験者のような心理的に健康な高齢者に対する「こころの生涯学習」の一環としても、ライフレビュー面接が有用であることが示唆されよう。

4．ライフレビュー面接による「こころの生涯学習」支援のために

Kimmel & Moody(1990)によれば、現在の高齢者のコホートは、心理療法に対する偏見が今よりも強かった時代に成人したため、心理療法を受けることは不名誉で受け入れ難いものととらえられており、高齢者の中に内的障壁の存在することが指摘されている。

本研究では、被験者がデイケアのために通所している老人保健施設内で面接を行うという構造であったことが、被験者のライフレビュー面接に対する抵抗感を減じていたものと推察される。したがって、高齢者の有する心理療法に対する抵抗感を低減するためには、臨床心理士が高齢者の身近に存在することがまず必要であろう。具体的には、高齢者施設への臨床心理士の配置や、老人大学など高齢者のための生涯学習の場への臨床心理士の参加などが考えられる。

そして、なによりも重要であるのは、高齢者に関心を有し、ライフレビュー面接をはじめとする､高齢者に対する心理臨床学的援助に専門性をもった臨床心理士の養成であろう。YAVIS 症候群として知られているように、セラピストは“若くて魅力的で、言語能力が高く、知的な成功者”が心理療法に適すると考える傾向にある(Schofield, 1964)。つまり、高齢者は心理療法に向かないという偏見が根強く存在するのである。

総人口に占める 65 歳以上人口の割合が 21%を越え、超高齢社会を迎えたわが国において、高齢者に対する心理療法への関心の涵養は、臨床心理士養成の上でも危急の課題であると考えられる。まずは、高齢者の心理臨床学的援助に対するニーズの存在を広く衆知すること、そして高齢者に対する心理療法の可能性を事例の集積から明らかにして、YAVIS 症候群を払拭していくことが第一歩であろう。本研究が些少なりともその一助となればさいわいである。

引用文献

Butler, R. N. 1963 The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, **26**, 65-75.

Erikson, E. H. 1963 *Childhood and Society, 2nd Ed.* New York: W. W. Norton.（仁科弥生(訳) 1977 幼児期と社会Ⅰ みすず書房）.

Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. J. 1986 Vital Involvement in Old Age. New York: W. W. Norton.（朝長正徳・朝長梨枝子(訳) 1990 老年期－生き生きしたかかわりあい― みすず書房）.

林 智一 1999 人生の統合期の心理療法におけるライフレビュー 心理臨床学研究, **17**,

390-400.
林　智一　2000　老人保健施設における心理療法的接近の試み―長期入所の高齢期女性との心理面接過程から―　心理臨床学研究, **18**, 58-68.
林　智一　2003　高齢者を対象とした力動的心理療法におけるライフレビューの臨床的利用　広島大学大学院教育学研究科博士論文（広島大学学位論文論題データベース <http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/metadb/up/diss/diss_otsu3673.pdf> (2011 年 11 月 20 日).
医中誌 Web　< http://login.jamas.or.jp/enter.html> (2011 年 11 月 20 日).
Kimmel, D. C., & Moody, H. R. 1990 Ethical issues in gerontological research and services. In J. E. Birren & K. W. Schaie(Eds.), *Handbook of the Psychology of Aging, 3rd Ed*. Maryland Heights: Academic Press. Pp.489-501.
Knight, B. G. 1996 *Psychotherapy with Older Adults, 2nd Ed*. Thousand Oaks: Sage.（長田久雄(監訳)　2002　高齢者のための心理療法入門　中央法規）.
Lifton, R. J. 1976 *The Life of the Self*. London: Deborah Rogers.（渡辺　牧・水野節夫(訳)　1989　現代、死にふれて生きる―精神分析から自己形成パラダイムへ―　有信堂）.
Schofield, W. 1964 *Psychotherapy: Purchase of Friendship*. Upper Saddle River: Prentice-Hall.
鑪幹八郎　1977　試行カウンセリング　誠信書房.
Webster, J. D., & Young, R. A. 1988 Process variables of the life review: Counseling implications. *International Journal of Aging and Human Development*, **26**(4), 315-323.
柳田國男　1945　先祖の話　筑摩書房（柳田國男　1990　柳田國男全集第 13 巻 筑摩書房）.

付記: 本研究は太陽生命厚生財団「平成 22 年度社会福祉助成事業」によるものである。

大学間連携授業における日常の写真共有に基づくワークショップのデザインと評価

尾澤 重知[*1]・森 裕生[*1]・末本 哲雄[*2]・山下 茂[*2 *3]

[*1]早稲田大学人間科学部 [*2]大分大学高等教育開発センター [*3]大分大学教育福祉科学部

要約:本研究は2010年後期に大分県内で実施された大学間連携授業を対象とした。ライフログ研究の応用として、携帯端末を用いて日常生活の撮影と共有を促し、グループでポスター作成を行わせるというワークショップをデザインした。質問紙調査による評価の結果、本ワークショップでは、日常の対象化を促す効果や、ディスカッションスキルの向上などの効果が見いだされた。また、ポスターで用いられた写真を検討した結果、「食」「授業」などの日常的な写真から時間軸などの構造を用いてポスターが作成され、日常の対象化が促されたことを示した。

Key Words:ライフログ 写真共有 携帯端末 大学教育 授業実践研究

1. はじめに

1.1 ライフログとは何か

情報機器、なかでも携帯端末の普及や、センサ技術の発展に伴い、人間の生活全般(life)をデジタルデータとして記録(log)し、何らかの目的で活用する「ライフログ」と呼ばれる手法が身近になりつつある(Bell & Gemmell 2009、和田 2010)。

ライフログの定義は広く、総務省の「利用者視点を踏まえたICTサービスに係る諸問題に関する研究会」(総務省 2008)では、「利用者のネット内外の活動記録(行動履歴)が、パソコンや携帯端末等を通じて取得・蓄積された情報」と位置づけられている。また、ここでは具体例として(1) 閲覧履歴、(2) 電子商取引による購買・決済履歴、(3) 位置情報が挙げられている。ライフログにはこのような側面もあるが、本研究ではライフログの教育利用に焦点を当てるため、利用者が携帯端末等で記録し、意図的に共有したデータに焦点を当てる。

身近な情報機器、携帯端末の代表格である携帯電話や、iPhone、Androidなどのスマートフォンには、デジタルカメラや位置情報システム(GPS)などのセンサが内蔵されている。誰もが気軽に写真を撮影し、それをどこで撮影したのかという位置情報も含めて記録に残すことが可能である。しかも、これらの記録はインターネットを介して、クラウド型サービス上にデータを保持したり、共有したりすることが容易になりつつある。

ビジネスベースで写真に特化したサービスとしては米国Yahoo!社のFlickr(2004年サービス開始、2008年米国Yahoo!社が買収)や、Google社のPicasa(2001年開始。2004年Googleが買収)が知られている。世界最大のソーシャルネットワーキングサービス(SNS)であるFacebookも写真の共有の容易さが普及の要因の一つという指摘がされており(Kirkpatrick 2010)、国内の大手SNSであるmixiなどでも類似する写真共有サービスが展開されている。SNSでの写真共有をライフログとして見なせば、2011年時点で世界8億人(Facebookプレスリリース2011年9月22日)、国内でも登録者で2千万人(mixiプレスリリース2010年4月14日)の潜在的な利用者が存在することになる。

写真以外も含めた記録サービスとしては、Evernote社(2008年開始)が知られている。携帯端末等からメモや写真などを容易に保存し、活用できるサービスである。2011年末時点で会員数は2000万を超え、75万人の有料会員がいると言われている(Alexia 2011)。国内ではソニー株式会社がLife-x(2008年開始)というライフログサービスを提供している。

国内のライフログの基盤研究では、食事内容を写真と共に記録することができる「食事ログ(Foodlog)」(相澤 2009)などが挙げられる。同研究室では他にも日々の衣装を記録させることで衣服選択の支援を行う「Dresslog」などの研究開発も進められている。どちらの研究も画像解析技術の応用研究としての特徴も持っている。

写真以外では、何らかの計測機器を用いて健康情報を記録、保存するサービスの普及度が

高い。国内ではオムロン株式会社がオンラインでの健康管理サービス「ウェルネスリンク」を 2010 年から提供しており、体重、血圧、歩数、活動カロリーなどの測定データをネット上で管理できる。専用の機器を用いると容易にデータを転送が可能になっている。

計測機器連動型では、Nike + iPod Sensor （2006 年開始）や、Fibit なども挙げられる。Nike +iPod Sensor では、スポーツシューズに専用のセンサを取り付けることで、ランニング記録等を専用のサービスで記録することができる。米国 Fitbit 社の Fitbit では（2008 年開始）、歩数計や睡眠状態の記録を行い、無線 LAN を用いて自動的に記録を専用のサービスに記録することが可能である。いずれも加速度センサなどのセンサを利用しているのが特徴である。

国外のライフログに関する基盤研究では米国 Microsoft が 2002 年から行っている「MyLifeBits Project」が知られている。ビジネスとしては健康管理サービスである HealthValut を 2007 年に開始しており、処方箋、投薬履歴、通院記録や、各種健康情報を記録できる。また、本人の認証により専門医や家族間での共有が可能である。

1.2 ライフログの教育利用

このようにいつでも何らかの記録を取り、共有できるということは、教育に何をもたらすのだろうか。教育・学習の文脈においては、学習者にデジタルデータでの記録を促しつつ、その内容についてのまとめ、キュレーション（佐々木 2011）や、振り返りを促すことができれば、これまで以上に記録を学習リソースとして応用できると考えられる。

教育の文脈では、カメラ付き携帯電話を用いた「食育」教育の研究（黒田ら 2010、岡崎ら 2011）、健康管理システムの構築（藤野ら 2010）などの例がある。渡辺ら（2011）はインターネットのウェブログに「食事日記」を書かせることの効果を検証している。著者らも過去に、情報デザイン教育の一環として、カメラ付き携帯電話を用いた実践研究を行った（尾澤 2006）。ここでは日常の「使いにくい道具」を撮影させ、当該内容を発表させることで、情報デザインで必要な批判的思考力や、身の回りから学ぶ力を育成することを目指した

本研究では、ライフログ研究から発想を得て、学生が日常生活で撮影した「写真」を学習のリソースとして活用できるような大学での授業実践をデザインし、その評価を行う。具体的には、大分大学が中心となって実施した大学間連携授業において日常生活の写真を用いたワークショップをデザインし、そこで学生がどのように自身の生活を捉え、第三者に対して伝えようとしていたか、またその前提となるワークショップの成果を検討する。事例検討を通して、日常生活におけるデジタルデータ、すなわちライフログを学習のリソースとして応用するための方法の検討が本研究の目的である。

2. 研究対象とした授業実践

2.1 授業実践の概要

本研究では、2010 年度後期（2010 年 10 月～2011 年 1 月）に大分大学で実施された授業実践「大分を探ろう」を研究対象とする。本授業実践は、大分大学が平成 20 年度に採択された文部科学省戦略的大学連携支援事業、「大分県における地域連携研究・留学生支援・教育連携を柱とする地方における高度人材養成拠点の構築」の一環として行われた。

表 1 授業履修者の所属（単位：人）

学生の所属		男性	女性	合計
大分大学	教育福祉科学部	7	7	14
	経済学部	18	4	22
	工学部	31	6	37
	医学部	3	3	6
	大分大学合計	59	20	79
連携校	大分県立芸術文化短期大学	0	2	2
	日本文理大学	12	4	16
	大分工業高等専門学校	17	2	19
	立命館アジア太平洋大学	9	11	20
	大分県立看護科学大学	1	0	1
	連携校合計	39	19	58
全体合計		98	39	137

本授業実践は、単位互換制度を前提としつつ、授業ビデオのオンデマンド配信や e ラーニングシステムの利用により、県内の連携大学の学生が受講可能である。2010 年度後期の授業実践では、大分大学から 79 名、県内の連携校から約 58 名、合計で 137 名が受講登録した（**表 1**）。大分大学では全学部・全学年の学生が受講可能であり、4 学部全ての学部の学生が受講した。連携校では連携 7 校のうち 5 校の学生が受講した。

履修者のプロフィールを見ると、1、2 年生の比率が高い。また、大分大学では履修登録者に対して男性が 74.7%、女性が 25.3%となった、連携校全体では男性 67.2%に対して、女性は 32.8%だった。全体では約 7 対 3 の男女比となっている。

2.2 授業全体の特徴

本授業実践には、いくつかの特徴がある。特徴は以下の 3 点に要約できる。

(1) 各連携校の教員による大分をテーマとした特色あるオムニバス講義。
(2) 授業のオンデマンド配信及び e ラーニングの利用。
(3) 大分県内の大学生間の交流を促す対面型ワークショップ。

以下、それぞれの特徴について整理する。

第一は、今回の大学間連携の趣旨を踏まえ、拠点地である「大分」をテーマとしている点である。授業は各大学から講演者を募り、いわゆるオムニバス型とした（**表 2**）。具体的には、大分の文化、歴史、芸術、観光資源、情報化、労働問題など多岐なテーマが扱われている。毎回の授業では「ミニレポート」を課して、授業の理解度や質問の把握を行っており、学生に対する評価は当該のミニレポートを中心に行った。

表 2 「大分を探ろう」授業内容一覧（2010 年後期）

回次	授業日	テーマ	担当者及び所属（当時）
1	10 月　6 日	ガイダンス	大嶋誠（大分大学教育担当理事）
2	10 月　13 日	温泉地再生と着地型ツーリズム：別府での取り組み	牧田正裕（立命館アジア太平洋大学国際経営学部）
3	10 月　20 日	文化の創造性のまちづくり	牧田正裕（立命館アジア太平洋大学国際経営学部
4	10 月　27 日	八幡神とは何か	飯沼賢司（別府大学文学部）
5	11 月　10 日	六郷満山文化 修正鬼会と峰入り	段上達雄（別府大学文学部）
6 7	11 月　14 日	合同対面授業	岡田正彦（大分大学高等教育開発センター）
8	11 月　17 日	豊後に流れた南蛮音楽～16 世紀の音楽交流	小川伊作（大分県立芸術文化短期大学音楽科）
9	11 月　24 日	芸術学入門～アートの世界	荻野哉（大分県立芸術文化短期大学美術科）
10	12 月　8 日	おおいたの歌碑を歩く	山田繁伸（大分工業高等専門学校一般科）
11	12 月　15 日	大分近世城下町の成立とその後～大分のまちの起源を探る～	島岡成治（日本文理大学工学部）
12	12 月　22 日	“おおいた”の夢創造型の地域づくり～大分からトキを再び日本の大空へ！～	工藤順一（日本文理大学経営経済学部）
13	1 月　12 日	情報社会の最新動向と問題点	渡辺律子(ハイパーネットワーク社会研究所)
14	1 月　19 日	大分の労働問題	石井まこと(大分大学経済学部)
15	1 月　26 日	大分を探ろう：まとめ	岡田正彦（大分大学高等教育開発センター）

第二は、授業のオンデマンド配信及び e ラーニングの導入である。連携校の学生は授業をインターネット上で受講し、毎回のレポートを学習管理システム（Learning Management System=LMS）で提出することとした。LMS にはオープンソースの学習管理システムである moodle のカスタマイズ版を導入して（図 1)、全履修者に登録・利用させた。

授業の収録やビデオ編集は、大分大学高等教育開発センターの専任教員が中心となり、学部学生の学生アシスタント（Student Assistant=SA）の補助を得て行われた。授業動画の配信は、株式会社日本 SGI のコンテンツ管理システム JNICOL blueSKY のカスタマイズ版を用いて Flash Video のストリーミング、もしくはプログレッシブ方式で行った（**図 2**）。また実験的に Apple の iPod touch や iPhone 向けのダウンロードコンテンツも作成した。

LMS の利用法や位置づけは、学生の所属によって異なる（**表 3**）。大分大学の履修者は毎回の授業を教室で受講し、ミニレポートの提出も教室内で行う。ただし、後述する合同対面授業のワークショップの準備のため LMS の利用は必須である。LMS 上に設定した BBS（電子会議室）にてワークショップのためのグループ活動を行うこととした。

連携校の学生は、実際の授業の約 1 週間遅れで当該授業をオンデマンド配信し、1 週間の受講期間内にミニレポートを LMS 上で提出させた。これらに加え LMS 上に設定した BBS を用いてグループ活動を行うこととした。

図 1 授業 LMS の画面例

図 2 オンデマンドでの受講例

LMS の利用にあたっては、大学院生のアシスタント（Teaching Assistant = TA）が利用支援を行った。期間中は週 1 回「授業サポートメール」と呼ぶ学習支援をメールマガジン形式で行った（**付録 1**）。先行研究からもオンラインでの受講では受講意欲（モチベーション）が低下する可能性が高いため（松田・原田 2007）、間接的な支援を行うことを意図した。サポートメールは、その趣旨から連携校の学生に対してのみ行った。

表 3 学生所属と LMS 利用などとの関係

学生の所属	授業の受講	LMS の利用	合同対面授業	サポートメール
大分大学	対面講義（教室で受講）	グループ活動	あり	なし
連携校	LMS を用いたオンデマンド受講	毎回のミニレポート提出 グループ活動		あり

第三は、学期中盤（第 6 回、7 回相当）に全ての履修者を 1 拠点（大分大学内）に集め、学生参加型のワークショップ型の合同対面授業を実施した点である。ワークショップは本研究の中心的対象になるため、次節で詳細について言及する。

3. 合同対面授業におけるワークショップ

3.1 ワークショップのデザインと事前課題

合同対面授業の内容、テクノロジの利用方法、また学生の評価方法については、授業全体に責任を持つ教員 4 名と大学院生のファシリテータ 1 名で検討した。ワークショップの企画にあたっては、前述したライフログ研究に加え、著者らの過去の研究（尾澤ら 2000、田口・村上 1999、神藤・田口 2000、末本ら 2009）などに基づき以下のデザインの方針を立てた。

(1) 様々な所属の学生間の交流を促進する。
(2) 学生が主体となるようなグループ学習を中心として行う。
(3) 学生間の交流を効果的に促すため学期中盤に実施し、事前事後の交流を BBS で促す。
(4) 自身や他者の経験からの学びを意識させるテーマ設定とする。

(5) 自身の地域や所属組織を意識させるテーマ設定とする。
(6) 上記目的を達成するためにテクノロジを適切に利用する。

具体的には、ワークショップの準備及び学生間の交流を促進するため、授業開始段階でグループ分けを行い、LMS 上で各グループの BBS を設けることで、学生相互のコミュニケーションが図れるようにした。グループは所属大学、性別、学年などを考慮しつつ、1 グループ 5〜6 名となるよう 28 グループを設定した。

ワークショップの課題は、「大分県の大学生としての 1 日の生活」をポスター作品として作成し、グループで 1 つの作品を発表することとした。また、そのための事前課題として、「自分の地域」や「自身の一日」をテーマとした写真を撮影させ、インターネットを利用してグループ内で共有させることとした。

本課題の狙いは 2 点ある。第一は、自身が生活している地域や日常を意識させ、対象化させることである。ライフログ研究においても写真は参加者が相対的に抵抗感なく利用できるメディアと考えられるため、「自分の地域」や「自身の一日」を写真のテーマとした。地域性に着目させたのは、今回の「大分を探ろう」の授業全体のテーマだからである。

第二の狙いは、多様性の尊重と成果の可視化である。ワークショップは授業に換算して 2 コマ相当（3 時間程度）と限られている。この制約の中で、多様なライフスタイルや視点に触れる機会を設けつつも、成果が見えやすい課題とした。

写真共有システムとして株式会社リコーのクラウドサービス quanp を利用し、携帯端末や PC から写真をアップロード・共有できるようにした。写真の撮影や共有にあたっては、カメラ付きの携帯端末の保有の有無や、情報環境の相違を軽減するため、カメラ付きの携帯端末（Apple iPod Touch 第 2 世代）を、1 週間を限度として学生に貸し出し、当該機器を用いることを促した。学内に無線 LAN 環境を持っていない学生に対しては、モバイル Wi-Fi ルータも併せて貸し出し、可能な限り情報環境の相違が生じないようにした。なお、システムとしては、授業として貸し出した機器だけではなく、一般のデジタルカメラの写真や、スマートフォンなどの携帯端末からも直接アップロードすることも可能である。学生には操作マニュアルを提供すると同時に、サポート窓口を設け、適時支援を図った。

3.2 ワークショップの流れ

ワークショップは上述したように学期中盤となる第 6、7 回に実施し、2 コマ相当の内容とした。当日はファシリテータ 1 名を中心として、教員 4 名、事前にトレーニングを行ったアシスタントの学生など 9 名が、参加学生らの支援を行った。

ワークショップには、大分大学からは 54 名（履修登録者に対して 68.4%）、連携校からは 42 名（同 72.4%）の合計 96 名（同 70.0%）が参加した。グループによっては人数が 1、2 名になる場合も生じたため、当日は一部グループを統廃合し、24 グループ編成とした。

参加者は、履修登録者数に対して両所属とも約 7 割程度である。この値は少ないように見えるが、本授業の単位認定者は全体で 102 名（履修登録者数に対して 74.5%）であり、単純に言っても、単位認定者の約 94%がワークショップに参加している。

ワークショップでは、次のようなインストラクションを行った。

(1) 各個人が事前に共有した写真を利用し、各グループで議論しながら（グループワーク）、広報誌に見立てたポスターを模造紙で作成すること。
(2) 自分たちのグループメンバーの写真のみを利用すること。
(3) ポスターの読み手（社会人、大学生もしくは高校生など）を意識すること。

グループに対しては、写真の選択と印刷のため各グループに 1 台のタブレット型 PC を用意した。また、共有のカラープリンタを複数台用意し、学生が任意の写真を印刷できる環境を準備した。学生の作業中、ファシリテータと教員は各グループに対して必要に応じて助言を行った。アシスタントは、写真の印刷の支援などを中心に行った。

作品の完成後は、2 教室でポスターの展示を行い（**図 3**）、学生間の意見交換を促した。授業の最後には、レスポンスアナライザ（クリッカー）を用いて上位 3 グループまでを学生の投票によって選出し、表彰した。

図 3 ポスター発表の模様

4. 研究方法

本研究では、ワークショップでのグループ活動を通して、(1) 学生らがどのような写真を選択したのか、(2) 日常生活の過程で撮影した写真をいかにポスターとしてまとめたかに焦点を当てる。このため 24 グループのポスターの内容を質的に検討する。とくに学生が実際にポスターで利用した写真に着目する。

事前準備として学生が共有した写真は 885 枚だった。また、ポスター24 件に含まれる写真は 247 枚だった。同じ写真が複数枚利用されていた場合、1 枚と見なした。写真の検討にあたっては 2 名の研究者が、ポスターに記されている説明なども参照しながら分析を行った。カテゴリ決定後、一致しなかった点は、協議して分類した。

本研究では、上記の写真の検討に加え、質問紙調査の結果を用いてワークショップ等の評価を行う。大分大学の学生に対しては学期最後の授業内で質問紙調査を実施した。連携校の学生に対しては、放送大学 ICT 活用・遠隔教育センターの REAS を用いたインターネット調査を行った。大分大学学生からは 56 件（履修登録者に対して 70.9%）、連携校からは 39 件（同履修登録者数に対して 67.2%）の合計で 95 件（同 69.3%）の有効回答が得られた。単位認定者数を母数とすると、単位認定者数の 93.1%が回答したことになる。

5. 結果

5.1 全体的評価

最初に、森ら(2011)の研究結果を踏まえながら、ワークショップの評価を 3 点検討する。第一は、オムニバス講義との対比におけるワークショップ全体の満足度である。第二は、ワークショップの学習効果。第三は、ワークショップで身についたスキルについてである。

最初に、オムニバス講義全体の満足度と、ワークショップの満足度を整理した（**表 4**）。大分大学の学生のワークショップに対する評価は 5 件法の加重平均値で 4.59（標準偏差 0.60)に対して、オムニバス講義は 4.01（0.89）だった。0.5 ポイント以上、ワークショップへの評価が高く、統計的にも有意差が見られる（$t(78)=6.56$,$p<0.1$）。

連携校の学生では、ワークショップへの評価は 4.53 (0.95)に対し、オムニバスは 4.10 (0.91)と同様に 0.4 ポイント以上ワークショップの評価が高い（$t(35)=2.46$,$p<0.5$）。なお、大分大学の学生と連携校の学生の評価間には、有意な差は認められなかった。

表 4 ワークショップとオムニバス講義への満足度評価

学生の所属	ワークショップへの評価 平均(SD)	オムニバス講義への評価 平均(SD)
大分大学（通常は対面受講）	4.59(0.60)	4.01(0.89)
連携校（オンデマンド受講）	4.53(0.95)	4.10(0.91)

第二に、ワークショップの効果に関する項目について検討する。調査では「メンバーと交流することで、他大学に対する印象が変わった（以下、「印象が変わった」と省略)」、「グループワークに参加することで、大学生の 1 日の生活について以前より意識するようになった（1 日の生活意識)」、「以前よりも日常の写真を携帯やデジカメで撮影するようになった（以前よりも撮影)」などの設問で評価を行った（**図 4**）。

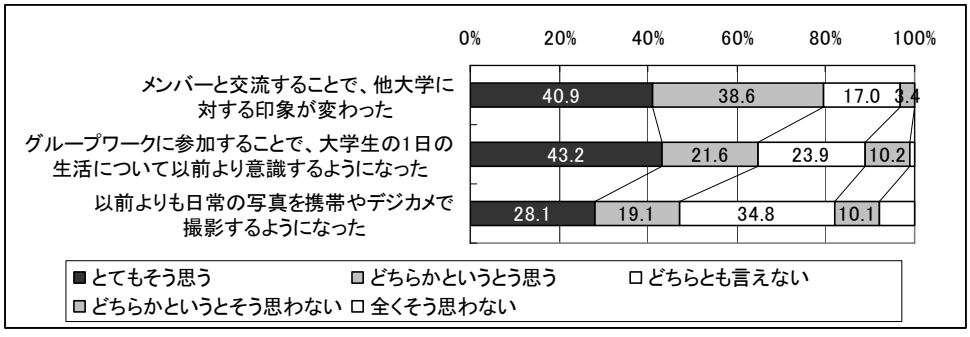

図 4 ワークショップの効果についての質問

結果、「印象が変わった」は加重平均値で 4.17 （標準偏差 0.83）となり、約 4 割以上の学

生が「とてもそう思う」と回答した。「とてもそう思う」と「どちらかというとそう思う」を合わせて 8 割弱の学生が肯定的に評価している。

「1 日の生活意識」は加重平均値で 3.95 (1.09)で、4 割以上が「そう思う」と回答し、肯定的評価は 6 割を超える。一方、本設問では「どちらかというとそう思わない」「全くそう思わない」を合わせた否定的評価は約 1 割を超えている。

「以前よりも撮影」は、3.49 (1.22)と他設問と比べても相対的に評価は低い。3 割弱の学生が「とてもそう思う」と回答し、半数弱の学生が肯定的に評価しているが、否定的評価も 2 割弱見られ、学生によって評価が分かれていると言える。なお、いずれの設問においても大分大学と連携校の学生間の評価には統計的に有意な差は見られない。

第三に、ワークショップで身についたスキルについて検討する。**図 5** に、「グループワークを通して、自分の意見を言う力が身に付いたと思う（意見提示）」、「グループワークを通して、ディスカッションの能力が身に付いたと思う（ディスカッション能力）」の結果を示す。

「意見提示」は、加重平均値で 4.08 (標準偏差 0.78) だった。「とてもそう思う」が 34.8%、「どちらかというとそう思う」を合わせた肯定的評価は 8 割弱となった。

「ディスカッション能力」については加重平均値で 3.93 (0.87) である。「とてもそう思う」が約 3 割で、肯定的評価の合計は約 7 割となった。両質問ともに否定的な評価は限定的であり、「意見提示」や「ディスカッション能力」について一定の評価を得たと考えられる。なお、本設問についても、大分大学と連携校の学生の評価には統計的に有意な差は見られない。

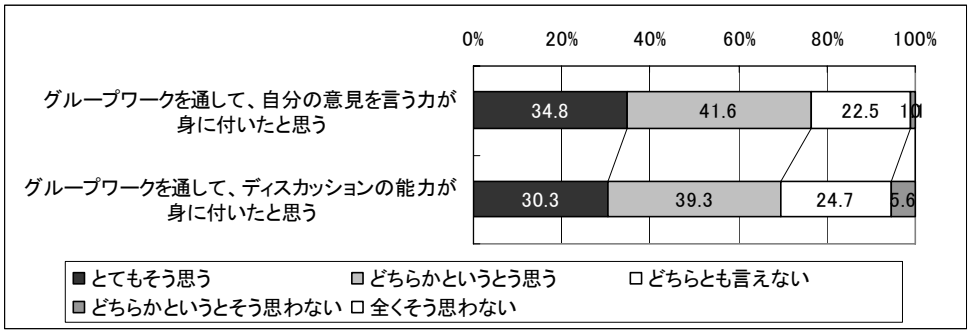

図 5　授業で身についたスキル

5.2　事前課題への取り組み

では、学生は実際にどの程度、事前に写真を撮影、共有していたのだろうか。前述したように、事前準備として共有された写真は 885 枚だった。大分大学の学生の提出者数は 51 名（授業履修者に対して 64.6%）、連携校では 32 名（同 55.2%）の合計 83 名（同 60.6%）だった。一人あたり約 10.7 枚の写真を投稿していたことになる。単位取得者数に対しては単純計算で 81.4%の学生が事前の写真共有課題に取り組んだ。

単位取得者数で見ても提出率は 8 割程度であり、事前課題の提出率は決して高いとは言えない。また、連携校学生からの写真の提出率は、大分大学の学生と比較して相対的に小さい。この理由として考えられるのは、第一に合同対面型のワークショップが参加必須ではなかったこと。第二に、写真をインターネットで提出することが学生にとっては容易ではなかったことが挙げられる。質問紙調査の自由記述では、「写真のアップロードに問題が生じた。この問題点さえクリアできれば後は問題ないと思う」「グループでやることはいいけど写真をアップロードしたりすることをもっと分かりやすくしてほしいです」などの意見が見られた。

写真のアップロードについてはマニュアルを整備し、サポートを行ったものの、課題が残ったものと考えられる。また、所定の期間内にアップロードを忘れたという学生も見られ、授業外の活動や、オンデマンド受講でのサポートの困難さを示唆する結果となった。

5.3　ポスターの類型化

学生らが作成したポスターの全体的な特徴を検討するために、ポスター内容の構造に着目する。24 件中、「大学生の 1 日」のように時間軸が見いだせるものは 16 件（66.7%）だった。時間軸以外の構造を持ったもの（例えば、「食事」「課外活動」などの内容別に写真を利用したもの）は 5 件(20.8%)だった。明確な構造やストーリーを持っていないものは 3 件(12.5%)だった。時間軸でまとめられている 16 件のうち、13 件は大学生活の複数の要素を扱ってい

るが、残る 3 件は「観光地」や「温泉」など特定のテーマに焦点を当てていた。**図 6** に時間軸を用いたポスター、**図 7** に時間軸以外の構造を用いたポスターの代表例を示す。

ポスター内容の構造に関しては、「大分県の大学生としての 1 日の生活」と言うテーマ設定や例示が影響を与えたものと考えられる。一方で、カテゴリ別に設定するものや、明確な構造を持っていない内容が全体の 3 分の 1 程度見られることから見ても、学生自らがそれぞれのグループの議論、及び判断でポスターを作成したことが伺える。

図 6 時間軸による構造的ポスターの例

図 7 時間軸以外のポスターの例

5.4　ポスター内で利用された写真の類型

次にポスター内に含まれる写真について検討する。写真は全体で 247 枚（1 ポスターあたり約 10.3 枚）用いられた。写真には印刷時や、その後の加工による写真の大小があるが、本研究では、これを加味していない。

内容について見ると、「食事」「授業」「通学途中」の光景、「課外活動」など 10 カテゴリに分類することができた（**表 5**）。最も数が多かったのは「食事」（学生食堂など食を取り上げたもの）で 57 枚（23.1%）だった。続いて授業や教室光景などを取り上げた「授業」が 54 枚で 21.9%となりこれらで全体の 45%を占めている。これら以外も多くは大学生活や地域性を踏まえた写真であり、日常に焦点が当てられていたと言える。

学生らがポスターとして取り上げた写真から、何を読み取り、どのように解釈するかは、慎重さが求められる。枚数に焦点を当てれば、「大学生としての 1 日の生活」において、「食事（食）」や「授業」は重要な位置を占めているとものと考えられる。

これらは、本ワークショップが授業の文脈で行われていることや、各グループでのディスカッションでも合意しやすいテーマであることも影響していると考えられる。また、前述した先行研究でも「食」や「食育」がテーマにされていたことから見ても、「食」は学生間で共有しやすいテーマであるとも考えられる。

なお、ポスターで利用されている写真について 24 件中 22 件は、複数のメンバーの写真が用いられており、作成の過程で個々の日常が振り返られていた可能性が指摘できる。一方、残る 2 件はメンバー1 人の写真のみだった。後者もグループ内での議論の結果と考えられるが、グループ学習としては、やや課題が残る結果となった。

表 5 ポスターで使用された写真の類型

種類名	写真数(比率)
食事	57 (23.1%)
授業	54 (21.9%)
通学途中の光景	23 (9.3%)
課外活動	21 (8.5%)
特定テーマ	21 (8.5%)
催し（学園祭など）	14 (5.7%)
人物	13 (5.3%)
一人暮らし	10 (4.0%)
動物	10 (4.0%)
その他	24 (9.7%)

6. まとめと今後の課題

6.1 本研究で見いだされた知見

本研究では、2010 年度後期に大分大学が中心となって実施した大学間連携授業を対象に研究を行った。ライフログ研究の応用として、携帯端末を用いて日常生活の写真を撮影・共有してもらい、グループの共同作業でポスター作成を行うワークショップをデザインし、評価を行った。また、実際にポスターで用いられた写真の検討を行い、学生がどのように自身の生活を捉え、第三者に伝えようとしたかを検討した。

質問紙調査を用いた評価では、第一に、ワークショップの取り組みは通常の講義型授業よりも学生の評価が高いことを示した。合同対面授業でのワークショップと、通常のオムニバス講義型の授業とでは、単純に比較ができない面もあるが、本ワークショップのように事前に準備が必要な内容でも、一定程度の評価がなされたものと考えられる。

第二に、ワークショップでの課題の工夫や、学生間の交流によって、他大学のイメージの変化を促し、「大学生の 1 日の生活」をはじめとする日常の対象化をある程度、促すことができたことも本授業実践の成果の一つと考えられる。一方で、ワークショップ後、日常の写真を撮るなど行動面の変化は限定的だった点は課題である。

第三に、ワークショップでは「自分の意見を言う力」や「ディスカッションの能力」などのスキル面の向上でも、一定の効果があったと考えられる。

いずれも学生の自己評価ではあるが、ワークショップにおいて「大分県の大学生としての 1 日の生活」をポスター作品としてグループで作成させるという課題設定や、そのための事前課題として、「自分の地域」や「自身の一日」の写真を撮らせるという構造によって、学生に対して一定の成果を上げることができたのではないかと考えられる。

ワークショップ前の写真共有に関しては、提出率は約 8 割にとどまり、参加者全員からの提出が得られないなど課題が残った。履修者の学習機会を均等にするため、携帯端末の貸し出しや、オンデマンド受講で普段、顔を合わせない連携校の学生に対するサポートなどの工夫を行ったものの、写真のアップロード方法の説明や、課題のインストラクションなど十分なサポートができなかったことが影響していると考えられる。

ポスターで用いられた写真の検討では、「食事（食)」や「授業」に関して全体で 45%以上の写真が用いられており、「大学生の 1 日の生活」というテーマにおいて、「食」や「授業」などが対象化されやすい可能性を示した。ポスター制作を促すことで、「食」「通学途中の光景」などの日常生活面と、「授業」や「課題活動」という大学での活動などを、写真という媒体を通して学生に対象化させることができたと言える。

6.2 考察と今後の課題

本授業実践は、大学連携事業という文脈を活かした内容であり、機材面などで恵まれた環境にあった。しかし、規模や条件を緩和させれば、今回のようにライフログとして記録と共有を促しつつ（個人の取り組み)、ワークショップでまとめを促す（グループでの取り組み）という課題の連携は、日常の対象化や振り返りを促す可能性が高いと言える。また、課題設定によっては、授業外の活動を容易に授業に取り組むことも可能であると考えられる。

テクノロジの進歩はめざましく、インプレス R&D による調査では、本授業実践を企画した 2010 年 9 月に 9.0%だったスマートフォン保有率が、2011 年 4 月に 14.8%、10 月には 22.9%と短期間で増加している（MCPC スマートフォン推進委員会, インターネットメディア総合

研究所 2011)。もちろん、普及とともに課題が生じる可能性も否定はできないが、日常的に得られるリソースの活用は、学習の場面で今後さらに重要になると考えられる。

謝辞

本実践研究を遂行するにあたり、大分大学高等教育開発センター、大分大学教育支援課、ならびに大分大学イノベーション機構リサーチファクトリーの関係者の皆さんに大変なご尽力をいただいた。とくに高等教育開発センター前センター長の西村善博先生、部門長の市原宏一先生には、企画段階で様々な助言を得た。また、高等教育開発センターの岡田正彦先生、牧野治敏先生には、授業実践の遂行にあたって支援を得た。学生アシスタントの皆さん、タマ氏にはワークショップを舞台裏で支えていただいた。また、ライフログの研究動向について東京農工大学総合情報メディアセンター江木啓訓先生から助言を得た。本研究は科学研究費補助金若手(B) 21700819 並びに、早稲田大学特定課題研究助成(B)2011B-271 の助成を得た。記して感謝したい。

参考文献

相澤清晴(2009) ライフログの展開. 電子情報通信学会技術研究報告 パターン認識・メディア理解研究会 109(64): 111-116

Alexia Tsotsis(2011) With 750K Paid Users, Evernote Brings In $18 Million A Year. TechCrunch, December 8th, 2011
http://techcrunch.com/2011/12/08/with-750k-paid-users-evernote-brings-in-18-million-a-year/
（2012 年 1 月 30 日確認）

Bell,G. & Gemmell, J. (2009) Total Recall: How the E-Memory Revolution Will Change Everything, New York: Dutton Adult （飯泉 恵美子 翻訳(2010) ライフログのすすめ―人生の「すべて」をデジタルに記録する!. 早川書房, 東京）

藤野猛士, 小山嘉紀, 松田敏之, 田邉学, 藤田佳孝, 横田一正(2010) カメラ付き携帯電話を利用したメタボリック症候群改善システムの開発と評価. 教育システム情報学会誌 27(1) : 111-117

Kirkpatrick. D. (2010) The Facebook Effect: The Inside Story of the Company That Is Connecting the World, London: Virgin Publishing（滑川海彦・高橋信夫 翻訳(2011) フェイスブック 若き天才の野望. 日経 BP 社, 東京）

黒田秀子, 竹中真希子, 稲垣成哲(2010) 生活科における食育学習の授業デザインの開発と評価--カメラ付き携帯電話による情報共有システム clippicKids を利用した親子での協同学習. 日本教科教育学会誌 34(2) :1-10

松田岳士, 原田満里子(2007) e ラーニングのためのメンタリング 学習者支援の実践, 東京電機大学出版局, 東京

MCPC スマートフォン推進委員会, インターネットメディア総合研究所(2011) スマートフォン利用動向調査報告書 2012. インプレス R&D, 東京

森裕生, 末本哲雄, 山下茂, 尾澤重知(2011) 大学間連携における学生交流型授業を導入したブレンディッドラーニングの交流促進評価. 日本教育工学会論文誌 35(Suppl.):161-164

岡崎泰久,岩橋遼平,竹中真希子,田中久治,渡辺健次(2011) 携帯電話による食認知支援システムの開発. 教育システム情報学会誌 28(2) : 141-150

尾澤重知, 佐藤綾子, 村上正行, 望月俊男, 國藤進 (2002) 学習者構成型授業における学習環境デザインの特徴と構造～電子掲示板を用いた遠隔間合同ゼミにおける合同合宿のプランニングの分析～日本教育工学会雑誌, 27(3) :143-154

尾澤重知 (2006) カメラ付き携帯電話を用いた情報デザイン教育の試み. 日本教育工学会雑誌 30(3) : 239-248

佐々木俊尚(2011) キュレーションの時代 「つながり」の情報革命が始まる. 筑摩書房, 東京

神藤貴昭・田口真奈(2000) 授業枠のゆらぎ－大学における学生主導型授業構築の可能性－」教育方法学研究(26) :119-127

総務省 利用者視点を踏まえた ICT サービスに係る諸問題に関する研究会(2008) ライフロ

グ活用サービスＷＧからの報告～ヒアリングを踏まえた今後の検討の視点～. 利用者視点を踏まえた ICT サービスに係る諸問題に関する研究会（第 3 回会合）配布資料
http://www.soumu.go.jp/main_content/000035704.pdf （2012 年 1 月 30 日確認）
末本哲雄, 鎌田康裕, 瀬川忍, 松本豊司(2009) クリッカーと SNS を用いた学習動機づけを高める実習授業の構築. 教育システム情報学会研究報告 23(5) :92-99
田口真奈・村上正行(1999) インターネットにおける高等教育実践研究の動向と課題 －KKJ 実践に向けて. 京都大学 高等教育研究第 5 号 :41-55
和田恭（2010) 米国におけるライフログを巡る最近の動向. 独立行政法人情報処理推進機構(IPA) ニューヨークだより 2010 年 11 月号
http://www.ipa.go.jp/about/NYreport/201011.pdf （2012 年 1 月 30 日確認）
渡辺昌子, 宮地文子, 岡村純(2011) インターネットウェブログを用いた食事日記作成の試み --20 歳代青年を対象として. 沖縄県立看護大学紀要 no.12:73-83

付録(1) 授業便り（メールマガジン）の事例

※URL は既に無効化されている。

From: 大分を探ろう <sagurou@bundai.net>
日付: 2010 年 11 月 17 日 13:47
件名: 【大分を探ろう】受講者サポートメール(11/17 号)
To: 大分を探ろう <sagurou@bundai.net>

大分を探ろう 受講者の皆さんへ

「大分を探ろう」受講者のサポート担当
大分大学 高等教育開発センターの森裕生です。

みなさん、合同対面授業お疲れ様でした。
参加された皆さんも、残念ながら参加できなかった皆さんも
残りの授業をがんばっていきましょうね！

□■ 合同対面授業を終えて----------■

楽しみにしていた合同対面授業も終わり、
気付けば「大分を探ろう」も折り返しを迎えようとしています。

今回の合同対面授業はいかかでしたでしょうか?
みなさんに会うのを楽しみにしていましたが、
なかなか話す機会がないまま終わってしまい残念な思いもあります。

また、残念ながら合同対面授業に参加できなかった皆さん。
合同対面授業に参加できなかった事がそのまま、
「単位認定できない」という事につながることは絶対にありません。
これからの授業をきちんと受けていきましょうね。
私も全力でサポートしていくので、最後まで一緒にがんばりましょう！

現在、皆さんに作成して頂いたポスターを撮影しています。
その写真を今週中に e-learning システムにアップロードする予定です。
アップロードが完了して閲覧できるようになってから、また、連絡しますね。

□■ ミニレポートより----------■

11 月 10 日に第 3 回授業のミニレポートを締め切りました。
今回は提出率が 80%程度に下がってしまいました。
いつでも授業ビデオが視聴できるオンデマンド型の授業ですが、
生活のリズムに組み込んで毎回確実にミニレポートを出すようにしましょうね！

オンデマンド授業受講のポイントを掲載していますので、

もう一度確認してくださいね。
http://www.tmanabi.net/pdf/sagurou_manabi_point.pdf

では、今回も私の目を引いたミニレポートを紹介しますね。

■----------■
僕の地元には富永神楽というものがあります。
今は後継者も減り僕がいた小学校では
神楽を受け継ごうとやってきました。
でも、僕が卒業した小学校も少子化のため廃校となりました。
昔の芸能をなくすのではなく
アートと一緒になることで新しい芸能として生まれ変われば、
若い人たちも集まって地域が発展すればいいなと思います。
(大分工業高等専門学校)□一部抜粋
■----------■
自分の出身地と合わせて、
自分の考えを上手くまとめていると思いました。
一生懸命、授業を聞いている様子が伝わってきました。
次も頑張りましょうね！

□■ ミニレポートの提出について----------■

第 4 回ミニレポートの提出期限が、本日 11 月 17 日（水）18 時までとなっています。
まだ提出していない受講生は必ず提出してくださいね。

また、第 5 回「六郷満山文化　修正鬼会と峰入り」の授業ビデオを公開しました。
ミニレポートの提出期限は、12 月 1 日までとなっています。
忘れないように早めに提出しましょうね。

それでは、次回の受講者サポートメールでお会いしましょう！

大分大学 高等教育開発センター

□sagurou2010@bundai.net は送信専用です。
返信できませんのでご注意ください。
■----------■
Copyright(C) 大分大学高等教育開発センター
「大分を探ろう」URL：http://www.tmanabi.net/
問い合わせ先：sagurou@bundai.net
本メールの無断転載を禁止します.
■ ----------■

教育の協働を推進する人材育成とネットワーク化の試み
～「協育」アドバイザー養成講座の実践から～

中川忠宣（高等教育開発センター）

【要旨】

子どもたちをめぐる様々な課題への対応、将来の地域を担う子どもの育成への期待を受けて、平成 18 年 12 月の教育基本法の第 13 条において、これまで言われて続けた「教育の協働」を法律で定めたということの意義は大きいものである考えている。国は改正教育基本法を受けて、平成 20 年度から「学校支援地域本部事業」を実施し、その中核となる「コーディネーターの配置」を推進してきた。大分県においても、それ以前の平成 17 年度から県単独事業として、コーディネーターの配置を中核としたモデル的な事業（「地域協育振興モデル事業」）を県内 4 市で実施していた。こうした事業が「施策」として徐々に定着しつつある中、本報告は大分大学高等教育開発センター（以下「本センター」という。）が平成 21 年度から実施した、地域の指導的立場にある者を対象に、より高度なコーディネート力（アドバイザーとしての力量）を養成するための研修事業と、その修了者のネットワーク化に関するものである。

Ⅰ　はじめに

大分県教育委員会は、平成 17 年度から県単独事業として「地域協育振興モデル事業」を実施すると共に、平成 18 年３月に「地域協育振興のためのＱ＆Ａ」を作成して、本施策を推進するための考え方を整理した。さらに、その推進方策として、モデル事業の成果や大分県社会教育委員による答申などを背景に「地域協育振興プラン」を作成し、全県的な普及を推進しようとした。そうした中、国は平成 20 年度から「学校支援地域本部事業」において「地域協育振興プラン」と同趣旨の施策を展開することとなり、本県の取り組みを、その考え方及び予算面において後押しする形となった。その施策の中核は一定アリアにコーディネーターを配置するとともに、コーディネーターの資質の向上であり、そのことをとおした地域住民の子育て支援のシステムをつくることである。

本県においては、平成 15 年度に、教職員対象の「教育の協働」に関する研修を体系的に行うことを検討し、地域住民の教育力の活用に関する教職員の意識改革を図ってきたが、いざ、こうした取り組みを行おうとすると学校の閉鎖性、コーディネート機能の未熟さ等が浮き彫りになり、大きな課題となって見えてきた。現在においても、社会教育課（旧生涯学習課）がその施策を担い、コーディネーターの配置やその研修等を推進しているところである。

こうした本県の現状を踏まえ、平成 21 年度から本センターが実施した「協育」アドバイザー養成講座の概要と成果を報告することとする。

Ⅱ　『協育』アドバイザー養成講座の概要

１．講座の基本的な考え方

（１）趣旨

改正教育基本法や教育振興基本計画をふまえ家庭・学校・地域社会が一体となり、地域ぐるみで子どもを育てる体制づくりを目的として「学校支援地域本部事業」が始まった。これまでは、家庭、学校、地域社会がそれぞれの取り組みとして行うことにとどまっており、もはや単独での取り組みは限界にきていると言わざるをえない状況であることから、家庭、学校、地域社会の相互の連携協力を促し、それぞれの教育力を向上させるとともに、教育を協働して行う必要性が明確になったと言える。これからの教育が、「青少年を育成する学校教育、社会教育、家庭教育の連携」、「家庭教育を支援するための福祉活動との連携」、「高齢者の生きがいを創出するための福祉活動との連携」等々、地域全体が連携協力して、縦割りの取り組みから、「横の接続」を促進する取り組みの重要性が認識されてきたと言える。

そこで、こうした取り組みに対して民間の教育力を発揮し、「家庭、学校、地域社会の教育の協働」を推進するために、地域ぐるみでの学校や地域での子どもの健全育成や家庭教育への積極的な支援、福祉と教育の融合、及び大人社会の再構築を推進するコーディネーターの養成を行うことを目的として開講した。

さらに、修了者のネットワークを組織化し、受講生の職場や地域での日常的な活動を支援するとととともに、受講生の活動情報の収集・分析や、「協育」コーディネーター育成プログラムの開発等によって、本県における「家庭、学校、地域社会の教育の協働」システムの構築を推進することを目的としている。

（２）主催　　大分大学高等教育開発センター

（３）内容・時期

①（基礎編）「協育」アドバイザー基礎研修：11月頃実施する。

②（中級編）「協育」アドバイザー専門研修：基礎編修了者で希望する者を対象に３月頃実施する。

③（上級編）「協育」アドバイザー実践研修：基礎編・中級編修了者で希望する者を対象に次年度の９月頃実施する。

（４）対象者

・学校や地域における各種コーディネーター

・各種団体・グループ、ＮＰＯ等の活動者

・社会教育主事等社会教育関係職員及び指導主事等学校教育関係職員

・その他、趣旨に賛同し職場及び地域等において受講したことを活用できる者　等

（５）修了証

各コースの講座を受講した者には、コースごとに大分大学学長の修了証を授与する。

（６）経費

教材、先進地視察に係る交通費等の実費を徴収する。

（７）申し込み（問合せ）方法

①受　付：郵送・ファックス・メール可

②申し込み先：大分市旦野原７００番地　大分大学教育支援課（公開講座担当）

（８）修了者のネットワーク化

修了者が、それぞれの職場や地域での日常的な活動を充実するための活動情報の収集・提供、それぞれの活動の情報交換、及び各種研修、モデル事業の実施、県内活動組織のネットワークの促進等を行うために「大分『協育』アドバイザーネット」を組織する。

２．二期生を対象とした各講座の概要（平成22年度～23年度実施）

（１）（基礎編）「協育」アドバイザー基礎研修

①研修の概要

趣旨

子どもは人間社会（地域社会）で教育され、「子ども自身が生き方を学ぶ」（キャリア教育）ための様々な教育活動や生きた体験が求められている。そのために家庭・学校・地域社会が一体となり、地域ぐるみで子どもを育てる「家庭、学校、地域社会の教育の協働」を推進し、学校や地域における子どもの生きた教育活動支援が重要となっている。

基礎編では、各種事例を通して教育の協働を推進する中核的な人材（コーディネーター）の必要性を理解すると共に、コーディネーターに必要な資質について学ぶ。

日時　平成２２年１１月１３日（土）９：００開講　～　１６：３０閉講

＝講座の内容＝

研修１：キャリア教育(子どもの生き方の学び）についての基礎知識

１．我が国の社会・産業の現状と課題

２．「キャリア教育」「キャリア教育支援」「キャリア教育コーディネーター」の意味

３．本研修が目指す方向としての我が国のキャリア教育の現状と課題

研修２：地域におけるキャリア教育(子どもの生き方の学び）及び支援の実践

１．キャリア教育に関わる全国的な取り組み状況

２．キャリア教育と学校教育・社会教育

研修３：キャリア教育コーディネーターの機能と役割

１．コーディネーターの機能

２．キャリア教育コーディネーターの役割

研修４：学校と地域・企業等とのネットワーク構築方法

１．コーディネーターの業務

２．地域における人的ネットワーク構築の必要性

３．コーディネーターのネットワーク化

②受講者のアンケート（受講者：28名）

☆参加者の内訳

各種コーディネーター	自治会関係者	地域活動関係者	行政関係者	教職員	ＰＴＡ等団体関係者	その他
2	1	１４	1	6	2	2

☆研修成果について。

プログラム名	項目	とても そう思う	まあ そう思う	あまり 思わない	全く 思わな
キャリア教育についての基礎知識	内容について理解できた	１８	９	０	０
地域の雇用や産業等の現状	内容について理解できた	１２	１３	２	０
キャリア教育コーディネーターの業務と役割	内容について理解できた	１５	１１	１	０
ワークショップ	内容について理解できた	１５	１２	０	０

☆この講座の前と後で、キャリア教育に対する考え方に変化がありましたか。

○教師自身、コーディネーター自身が勇気をもって諦めず人と関わろうとし続けることが大切だと思った。頭をやわらかくして、物事を見ることの大切さも改めて感じた。

○講座を受ける前はとても難しいことのように思っていたが、講座を受けてみて私たちの身近なところでも行われていると思った。

○アドバイザーのますますの重要性を認識した。ただし、教育行政のトップや首長がキャリア教育に対する認識を深めていくような働きかけをどうしたらよいのだとうという課題が生じてきた。

○キャリアとは「キャリア」「ノンキャリア」という理解が強かったが、生きる力、つなぐ力、伝える力、知ろうとする力と言い換えると分かりやすくなった。しかし、個人の努力や奮斗に帰結することには疑問がある。

○児童、生徒の“やる気”を引き出す為の体験と教科学習のリンクが大切であるとの考えを裏付けしていただいた。

○キャリア教育に対して偏見を持っていた。放課後子ども教室にくる子供たちの中で「生きることに冷めている」ようなびっくりするような対話（会話）に直面し、中途半端で面倒なことには目をそらす。そういう状況を見たので、なぜ「キャリア教育」が必要なのかを実感した。

☆コーディネーターの必要性や役割について

○今回改めて知ったのは、コーディネーターが全てをするのでなく、発信・計画などをしながら進めていくということでした。

○コーディネーターの必要性を感じた。そのコーディネーターが学校に提案していく、コミュニケーション能力の必要性も感じた。
○コーディネーターとして現実にその存在や意義が生かされているとは言い難い状況がある。行政もおよび腰、一般の方も大きくものをとらえることに不慣れな面もあるようで、認識を深めていくことがとりあえずの方法でしょうか。
○一生においてめぐりあえる人は限られている。しかし、コーディネーターの人の活動が広がれば、より多くの人との出会いができ、その人たちの知識や人間性の素晴らしを広め、多くの人がそのことに触れることができ、すばらしいことだと思う。
○必要性については、理解もし共感もできたが、教育の一助をするという責任の大きさに比べ有事での責任のとり方等今一つ腑に落ちない点があった。

☆学んだこと、感じたこと、今後の活動に生かせそうなことなど

○現在の活動に加え“ほんもの”を子供たちに届けられるよう企画力、提案力を身につけていこうと思った。
○県内各市町村の生涯学習（社会教育）関係者が受講すれば役に立つのにと思った。
○今まで考えてみなかった…というより、気づけなかったコーディネーターという存在を知ることができ、自分自身、一つ大きく成長できたかな？。できるきっかけがあり、とてもうれしく思う。今日の講座がどう自分の中で生かされていくか、今はかすかしか見えないが、でも是非、何かに参加していきたい。
○講師の先生方のエネルギーをいただき、私にも何かできるのではないかという気持ちになった。資源の中に「人材」の重要性を強く感じたし、そのためにも、人とのつながりを広め深めるよう心掛けていきたいと思う。
○誰かがしてくれるのではなく、自分の体を通じて子育て活動したい。
○自治会組織の中での子供会－ PTA －学校の繋がりを強化していきたい。自分でできることは小さく少ないが、企業 OB としての連絡活性力を地域に根付かせたい。
○昔はふつうに声かけしたり、叱ったり、ほめたり、遊んだり、ご近所同士でやっていたことが、時代の流れでこんな苦労するんだと思った。講師はどなたも熱意あふれるものですごかった。
○もっと研修を受けたい。継続的に学校に入り、学校のカリキュラムの中で計画を立て、実践していきたいと思った。活動の立場がほしい。総合案内所としての役割を果たすことができるよう経験を積み重ねていこうと思った。

☆今後の講座の内容について

○県内、県外の先進的な事例をもっと多く学びたい。
○大分における生涯学習、社会教育の実態は、九州各県と比べてどうなのか。全国的にはどうなのか。大分における生涯学習、社会教育の過去、現在、未来について知りたい。
○「村おこし」「街おこし」等の活動との関係を知りたい。
○学校側の要望、要請などを具体的に知りたい。
○企画書を作成するためのポイント、手順を学びたい。

（２）（中級編）「協育」アドバイザー専門研修

趣旨

家庭・学校・地域社会が一体となり、地域ぐるみで子どもを育てる「家庭、学校、地域社会の教育の協働」を推進し、学校や地域における子どもの健全育成や、家庭教育への積極的な支援を行う体制の整備のため、その中核的な人材の養成を行うための専門的な研修を実施する。

中級編では、家庭、学校、地域社会の現状を学び、コーディネート能力の養成のための、様々な活動に関するプログラム企画力を養成し、提案し、実践するためのスキルの向上を図ることを目的とする。

期日　　平成２３年３月１９日（土）・２０日（日）

＝講座の内容＝

	時間	内　　容
一日目	9:00 ～	開講式（挨拶・説明）
	9:20 ～ 11:20	講義１　家庭教育の現状・課題と教育の協働の視点 講師　大分大学教育福祉科学部教授　山岸治男
	11:30 ～ 14:20	講義２　地域社会の現状・課題と教育の協働の視点 講師　大分大学高等教育開発センター准教授　岡田正彦
	14:30 ～ 16:30	講義３　学校教育の現状・課題と教育の協働の視点 講師　大分大学教育福祉科学部教授　山崎清男 ※事例発表　佐伯市立蒲江小学校教諭　伊東俊昭
二日目	9:00 ～ 14:00	講義４　子どものための「協育」を推進するコーディネーターの実際 ～全国のキャリア教育コーディネーターの活動事例を含めて～ 講師　特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長　生重幸恵氏 講義５　身近なエリアの人を巻き込んで企画する「子どものためのプログラム」作成 （演習）講師　特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長　生重幸恵氏 特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク　井上尚子氏
	14:10 ～ 16:10	講義６　「協育」アドバイザーとしての基礎的スキルの学び （演習）講師　大分大学高等教育開発センター教授　中川忠宣
	16:20 ～	閉講式（修了証授与・アンケート等）

②受講者のアンケート（受講者：25名）

☆今後、職場や団体、地域でどう生かしていくか

○今回の受講でもっと地元の団体を知っておく必要性を強く感じた。今後の活動を行う上で自らの活動の幅を広げていこうと思っている。

○２日間学んだことを自身が取り組んでいるサークル活動に生かしたいと思った。特に協力者の拡大等について取り組んでいきたい。

○演習で意見を出し合ったが、視点の違い、理解の差があり討論の難しさを改めて感じた。地域で実際に進めていくためには、細かな打ち合わせ、共通理解が必要であると思う。

○具体的な事例を挙げて話をしていただいたので明日からの元気をもらった。今後の事業の展開に非常に参考になった。中学生の自主サークルで高齢者との交流の話は大変興味があった。具現化できないか各方面の方々（協力団体、教委、学校）に相談したい。

○教育現場の様子がよく分かったので、どのような持ち込み方でわが町が動くのかを考えたい。

○ニーズの掘り起こしを積極的に行い、学校支援につなげられるよう人材の掘り起こしと名簿等の作成も行いたい。

○今まで受け身であったＰＴＡ活動を“活動発進”に変えていき、ＰＴＡの役割を生かしていけるよう取り組んでいきたいと思った。その取り組んでいくスタートがはっきりと見え、何から取り組んでいくかも見えてきたので４月スタートに準備していきたい。“３つの協育”をうまく構成して取り組んでいきたい。

○次年度から地元の公共図書館と学校図書館への情報提供をすることになったので、図書館と学校だけの関わりに止めるのはもったいない気がしてきた。お話ボランティアの方たちとも連携を持っていけそうな思いが出来た。

☆今後の講座の内容について

○現場の先生方のニーズについて生の声や職場教育との結びつけの事例など、すばらしい取り組みをたくさん聞きたい。

○学校教育の中に素人の住民が関わって良いのか、どう関わることを求めているのかについて学校の考え方を知りたい。

○各自治体でどのような取り組みがなされているのか、現状と今後の方向についての情報を知りたい（より詳細な）。

（３）（上級編）「協育」アドバイザー実践研修

趣旨

本研修は『協育』アドバイザー養成講座の基礎編・中級編の修了生を対象に、県内外での「教育の協働」を推進・実践する先進地を視察し、地域づくりや青少年の健全育成に関する中心的指導者・コーディネーターとしての資質を向上し、以て、「教育の協働」の推進に関するアドバイスの力量を高めることを目的とする。

期日　平成２３年９月２７日（火）～２８日（水）

＝視察先＝

○財団法人山口県ひとづくり財団　県民学習部「生涯学習推進センター」
（山口県山口市秋穂二島１０６１）

☆山口県民の学びを支援すると共に、「人づくり・地域づくりフォーラム」を開催し地域活動リーダーの育成を行う等、県民の生涯学習・社会教育活動の推進状況について学びます。

○山口市鋳銭司小学校　　（山口県山口市大字鋳銭司）

☆平成２１年度から先導的に取り組み始めた、地域住民が学校教育にどうか関わり、支援していくかというコミュニティースクールの取り組みについて学びます。

☆その他

○本研修終了後に、「研修レポート」を提出する

②受講者のアンケート（受講者：8名）

☆県民学習部「生涯学習推進センター」から学んだこと

・セミナーセンターとして、研修事業を１箇所に集約しているという施設規模のすごさにびっくりと同時にうらやましさを感じる。

・人づくり地域づくりフォーラムは篠栗、国東とプログラムの差はあるだろうが、同様なフォーラムが開催されていて、全都道府県の参加を促す工夫、努力されている様子が良く伝わった。いずれにしても、山口県が社会教育・生涯学習として進歩的であることがうかがえる。

・センターが一元化、一箇所化されていることは、全世代間、全ジャンル間の情報がそこに集約されていて、情報の共有や活用や協働が円滑に行われるのであろうと察した。

・昨年は、１年生として福岡方面を視察・研修、今年はＯＢとして参加したわけだが、１年間の蓄積を今回の研修とどう結び付くか、そんなことも考えて参加したが、昨年に比べて、「見える、理解できる」を感じた。１年の時間が無駄になっていない思いである。ＯＢとして参加することの意義を伝えたい。また、「協育」ネットの将来像、目標像を見た思いを強く持ったものである。大分県頑張れの気持と、我々「協育」ネットの使命感、夢を改めて抱くことになった。

☆山口市立鋳銭司小学校から学んだこと

・学校長をはじめとする教職員が、積極的に地域ボランティアを受け入れているが、まずは、校長自ら地域に出向き地域資源の活用の必要性を訴えたことで、地域の方にも思いが伝わりやすかったのではないかと考える。

・無償のボランティアであるが、子どもから元気をもらえ、学校に来る楽しみがあるというボランティアさんの言葉が印象的だった。

・授業の中で、担任の先生とボランティアさん

の役割分担ができており、児童も自然に受け入れているのはとても素晴らしい。

☆今回の視察研修から学んだことで、今後の自分の活動に活かしたいこと

Ａさん：「協育」も「協働」も一人ではできない。たくさんの〔力〕が集まるからこそ子どもに地域に多くの笑顔や喜びが生まれ自分も〔力〕の出せる、活かせる人になるよう前進・前進で努めていきたいと思います。その中で、今、一番身近な学校で学習支援活動の素晴らしさを伝えたり自分自身も関わっていける場を見つけ取り組んでいきたいと思います。

Ｂさん：学校・地域の向上に自分の知識・経験および経歴で何が出来るのか？の自問自省だけでは何も生まれず変革は望めない。このような姿勢は既存組織が旧例にない・人手がない・予算がない etc 等々の理由から、変革を受け入れない事と同次元の問題ある。自分は何に興味が有るのか、そしてこれをしたい、との強い思いが基本にあって行動することが大切であり、改革（大層な表現であるが）の第一歩となると学んだ。

退職老人である同期生の集まりを、愚痴・不満の発露の場だけにとどめず、集約し行動する集団にしてみようと考え始めている。退職老人の性として、何か協働でしようとすると何のために・誰が・何を・何時までにするのか等々詳細を確定しなければ行動しないし、出来ないとするだろうが（今までの事例からも―）。この意識の変革は頑迷な老人だけに難しく、最初から全員一致は望めないものと考える。

Ｃさん：２つの研修は身近な問題としてすでに見聞していましたが、今回の研修はきちんとした質疑応答時間を持っていただいたことによって、問題を打開していくためには「人」を養成するシステムつくりが重要であることという理解に繋がったと思います。また、参加したメンバーのみなさんと打ち解けて、親しくお話しさせていただいたことが大変刺激となりました。今後の活動をするうえで、個人の活動の努力と共に行政などの組織と連携をとりたいと思う時、この「協育」アドバイザーからの支援があれば心強いのではないかと思いました。

Ⅲ　研修生のネットワーク化

１．ＮＰＯ法人大分県「協育」アドバイザーネットの目的

ＮＰＯ法人大分県「協育」アドバイザーネットは、市民・企業・団体・教育機関などと一層協力しながら『協育』の推進をめざし、その啓発と普及・調査研究・相談支援などに関する事業を行うとともに、県内各地で取り組まれている様々な『協育』実践を交流し合い・重ね合い・深め合い・広め合うために平成23年12月７日に設立された。

このことにより、従来にも増して、学校と家庭と地域における総合的な『協育』力の活性化とネットワーク化をめざし、幼児・児童・生徒の体力・学力の向上はもちろん、生きる力を育てるキャリア教育に関するコーディネート支援もおこなう事としている。更に、

平成23年12月18日には、全県的なネットワークづくりをめざした大分県『協育』ネットワーク協議会の設立に伴ってその事務局を担う事となり、新しい公共の担い手づくり、新しいパートナーづくり、新しいアドバイザーづくりをめざして活動を行うこととしている。

【会員数】（正会員・特別会員・賛助会員の合計人数）H24.3末現在

第一期生	第二期生	第三期生	総会員数
１５名	１５名	３１名	６１名

２．事業内容

事業の柱は３つで、その内容は次の通りである。

（１）人材育成事業

①「協育」アドバイザーを育成する事業を行う。

②「協育」コーディネーターの交流を促進する事業を行う。

③学習ボランティアを育成する事業を行う。

④研修事業への積極的な参画を行う。

（２）普及・実践事業

①教育の協働を広げるためのコンサルティング事業を行う。

②「協育」推進事業＝教育の協働を推進するための活動＝

○「教育の協働」を推進するためのモデル的な事業を行う。

○現代の課題に対応して「協育」という視点からのプロジェク的な事業を行う。

○青少年の自然体験・生活体験や地域発見型体験活動など「協育」という視点からのプログラム開発事業を行う。

○「教育の協働」という目的を同じにする事業との積極的な連携・共催を行う。

（３）研究・啓発事業

①「教育の協働」の推進に関する調査等を行う。

②「教育の協働」普及本やＱ＆Ａなどの資料等を作成・発刊する。

③ＮＰＯ法人大分県「協育」アドバイザーネットの活動に関するＰＲ活動を行う。

Ⅳ　成果と課題

各地域で「協育」の柱となるコーディネーターとして活躍する方々と協働で活動するために、アドバイスできる力量を養成することと、活動のシステムづくりを進めることの重要性が認識できた。県内の様々な組織のネットワーク化の取り組みは始まったばかりであることや、本講座の受講生の活動分野や活動へのスタンスの違い、地域からの要請の不透明さ、地域の様々な組織の縦割り事業という現状等から、今後とも、継続した全県的なコーディネーターの養成とネットワーク化が必要であり、ホームページを活用した啓発を行いつつ、県内広域なネットワークを張るための本講座の充実を図っていきたい。さらに、ＮＰＯ法人大分県「協育」アドバイザーネットが、地域の様々な組織のネットワーク化の中核として活動をするための支援も、本センターの役割であることを認識し、更なる支援を行っていきたいと考えている。